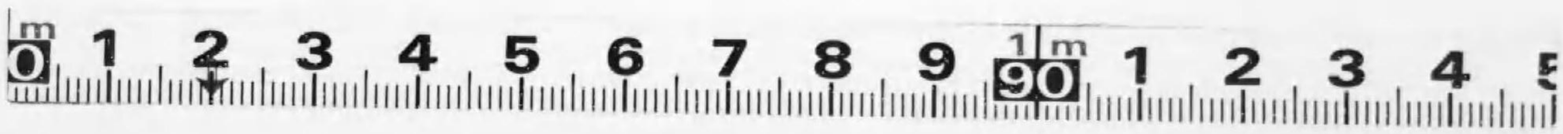
506
1

投



てしらか

たれ生へ世のこが兒嬰

高倉輝著

短篇集

ARS

たれ生へ世のこの兒嬰

てしうか

高倉輝著作集

第五輯

短篇集

ARS

大正
13. 6. 28
内交

目次

髭……一
夫婦……一九
三市と阪井野巡査……九五
雲……一一七
波の音……一三一
かうして嬰兒がこの世へ生れた……一六七

106-1

髭。

裝釘　中川修造氏

福助といふ若い祇園の藝者のはなしである。

この福助の檀那に「長さん」といふ中京の坊ちがゐた。長さんは、これは京都にもたつた一軒しかないといふ、坊さんの袈裟を織る織元のひとり息子で、屋號を長州屋といふところから、それでみんなが「長さん、長さん」と言つた。

長さんは母親とは早く死にわかれて、今はもう六十の阪をこした、人の好い、いつもにこにこしてゐるお父さんと二人きりの、ほんとうの父ひとり子ひとりであつた。

長さんはずゐぶん福助にあつくなつてゐたやうである。

三日に一度ぐらゐの割で長さんの姿がきまりのお茶屋で見うけられる。そばには大抵福助が侍つてゐる。けれども、どうかすると福助のからだの都合のつかないやうなこともある。

さういふ時には、長さんはひどく淋しさうな顔をする。

なにしろ福助の檀那は長さんひとりで無い。みすみす長さんの座敷からほかの檀那の座敷

へ廻らなくてはならないなどといふこともある。

そこで、お茶屋の人たちから、いつそ福助を「お客どめ」にしてはどうかと言ふことがときどき長さんのまへで仄かされた。ところが、どう言ふものだか、長さんはいつもあやふやな返事ばかりして、一度も判然したことを言はないものだから、ついその儘になつてゐた。

あとでの話しに、何しろ長さんはあのとほりの遠慮ぶかいたちだから、しんじつ福助が長さんを好いてゐるのならとにかく、萬一さうで無くて、福助が長さんだけをお客にしなくてはならなくなつて、そのために少しでも窮屈な思ひをさせるやうなことが有つては、何とも申しわけがないと思つたのであらうと言ふことであつた。

元來、長さんは極く内氣で、極く無口な、なにを言はれても唯だ默つてにこにこしてゐる、本當におとなしい一方の坊んちであつた。おまけに、その長さんの口の利きぶりと言ふのが、これが又いかにも悠くり間のびのしたものなので、なほのことおつとりして見えたといふのである。

とにかく、まあさう言ふ風にして、長さんと福助とのあひだは二年つづいた。

その間には、長さんのお父さんもときどき長さんと同座して福助と一緒になることがあつた。そして、ときどき、これは長さんには内證で、特別のお手當が福助に下ることがある。まあ、長さんの心ひとつで、福助を家へ入れても好いとお父さんも思つたのであらう。

そのうち、世のなかに變動があつて、あつちこつちに成金がだいぶ出來た。そして、その成金の一人が福助の檀那になつた。

それと聞いた長さんのお茶屋の女將は、直ぐに長さんに會つてその話しをした。そして、いま長さんの手で福助をお客どめにしなければ、きつとその成金のお客がお客どめにするに相違ないと言つた。その成金の客といふのは、ただ無闇と藝者をお客どめにして、それで自分の全盛をほこる人なのださうである。

長さんは始終だまつて聞いてゐたが、はじめは強ひてにこにこしてゐたのが、しまひには義理にも笑顔ができなくなつて、いつかひどくまじめな顔になつて了つた。そして、いつまで立つても、するともしないとも、まるきり返事をしない。しまひに少し變な顔をして、長

さんのその色の白い横顔をながめてゐた女將は、

「一體どうやのどす。あんたはん本當はそない言ふほど好きやおへんのか。福助はんならんてほどでもおへんのか。」

ふと笑談口のやうにさう言つた。

すると、突然ひよいと長さんが顔を擧げた。見るなり、女將は思はずぞつとして了つた。いつもの長さんとはまるきり顔つきが變つて了つてゐるのである。そして、なんだか變にどんよりした鈍い目付で凝つと女將の顔を視つめてゐた。女將は思はず震へあがつて、あわててうしろの方を見返つた。

あとで女將は、やつぱり長さんはあの時分からもう氣が變になつてゐたのだと、しきりに皆に吹聽した。

それから間もなく、果して福助はその成金の客の手でお客どめになつた。福助の姿はもうたまにしか長さんの座敷に見ることが出來なくなつて了つた。

そののちも長さんは相變らずお茶屋へ來た。ただ、まへよりも幾分その度數が減つて、そして、まへよりも更に一層陰氣になつた。わかい藝者や舞妓のだわけも無くはしやいで騷ぐ賑やかな座敷の樣子なんぞはさつぱり眼に入らないらしく、ただ一人でぼんやり考へこんでゐるやうなことが多くなつた。

そして、いくらお茶屋の人たちがすすめても、今度はどうしてもほかの藝者の檀那にならうとしなかつた。福助も、それからその女將にあふ度に、長さんには自分のかはりが出來たか出來たかと聞いて、そして、いつまで立つてもそれが出來ないと聞くと、いつもひどく厭やな顔をした。

そのうち、ぱつたり長さんの足がとまつた。女將はどうしたのだらうと思つて、さつそく長さんの中京の家へ見舞ひに行つたが、すると、店へは例の人の好いいつものお父さんが出て來て、長さんはこないだ中から少し加減がわるくて寐てゐると言つた。そこで女將は長さんには逢はずに歸つた。

それから間もなく、長さんが氣が變になつたと言ふ噂がぱつと立つた。そして、今は明石の別莊のはうで養生してゐると言ふことであつた。

一日、福助と女將と偶然往來で出逢つて、その話しをして、兩方とも暫くひどく無氣味な顏を見合つてゐた。

それから復たしばらく時がたつて、みんなもう長さんのことなんぞ忘れて了つてゐた。ちやうど秋で、高臺寺の萩が盛りであつた。

流連の客につれられて、福助も午すぎから二三人の藝者と一緒に萩見にいつたその歸り途に、眞葛ヶ原から西行庵のはうへ出る廻り角で、東大谷のはうから降りて來る二人の男づれとばつたり出逢つて、福助は思はず惚くり立ち留まつた。それが長さんと長さんのお父さんとだつたのである。

福助は、とにかく連れの人たちに一足さきへ行つて貰つて、また改めて二人のそばへ戻つ

て來た。まづお父さんに久し振りの挨拶をして、それから長さんのはうへ向いた。

意外なことに、長さんは非常に元氣な樣子をしてゐる。第一、いかにも血色が好い。そして生き生きしてゐる。福助がお父さんに長い挨拶をしてゐる間も、長さんは平氣な顏をしてきよろきよろそこらを見廻はしてゐた。

それに、第一、福助の驚いたことには、長さんは鼻の下に見事な髭を貯へてゐる。中京の商家の息子が八字髭をたくはへるなどといふことは先づ絶對に無いと言つて好いのである。

「あんたはん、久しぅお惡かつたさうどすな。もうすつきりと宜しおすか。」

福助は長さんのそばへ寄つて挨拶した。

「へえ。もうすつきりと宜しおす。」

長さんはいかにも快活な調子で答へた。そして珍らしさうに福助の顏を見ながら、

「何どすか。あんたはんももうすつきりと宜しおすか。」

と聞いた。福助は、思はずどきりとして、やつぱりまだ狂うてはるのやなあと變に儚ない氣がしたが、しかし、

「へえ。おほきに。お蔭でもうすつきりと宜しおつせ。」

と、ただ何となくばつを合はせるやうにさう言つた。

「さうどすか。もう宜しおすのか。それは宜しおしたなあ。」

長さんはやはりいかにも明るい調子で、まるで笑ふやうな眼をしながら言つた。

その時、お父さんが福助を傍へ呼んで、實はお見かけしてお願ひしたいことが有るのだが、そのうちに一度ゆつくり會つて貰へまいかと言つた。福助はすぐに承知した。こちらから都合の好い日を知らせることにして、そして別れた。

そのあひだも、長さんは、やはり平氣であつちこつち他所見をしてゐたが、別れしなに福助が傍へ寄つて、

「それでは御免やす。おほきに。」

と言つたら、長さんも元氣よく、

「おほきに。さいなら。」

と言つて、けろりとしてゐた。

福助はなんと言ふこと無しに涙ぐんだ。

それから二三日して、福助は木屋町のある待合の二階で長さんのお父さんに會つた。

お父さんはこまごまと話しはじめた。

はじめ、長さんは、明石へ行つた當座ひどく惡かつた。毎日、陰氣な顔をして一間にとぢ籠つたきり、一足も外へ出ようとしない。いくらお父さんなんぞが傍から優しく話しかけても、まるきり返事もしない。殆ど口を利かないやうな日が多かつた。

それがこの秋から突然がらりと變つた。急にばかに快活になつて了つた。そして、家の商賣のはうが氣にかかつてならぬからと言つて、幾らとめても聞き入れないで、大急ぎで京都の店へ歸つて來た。

歸つただけならまだ好いのであるが、困つたことには、朝も誰よりも早く起きて、第一番に店へ坐る。そして、お客が來ると、眞つ先に、

「お出でやす。」

と大きな聲で元氣よく聲をかける。

おまけに、も一つ困つたことには、何と思つたのか、あのとほり髭を生やして了つた。店へ來るお客さまその他にもまことに恥かしくて困るのだが、しかし誰がなんと言つて留めても、どうしても承知しない。大變いやなことをお賴みして何とも申しわけが無いが、一つあなたからもあれに店などへ出ないやうに言つて貰へまいか。何しろああ言ふ風だから、やはり駄目かも知れないが、駄目なら駄目で諦めるから、まあ驗しだと思つてさう勸めて見て貰へまいか、とさう言ふのである。

お父さんは、やはりいつものにこにこした機嫌のいい顏をして話したが、眼には涙が浮かんでゐた。福助は始終鼻をつまらして幾度も手巾を眼にあてた。

福助はすぐに承知して、わたしが言つてもたうてい無駄だとは思ふけれども、とにかく言ふだけは言つて見ませうと引き受けて、すぐひとり長さんのゐる部屋へ行つて見た。

長さんは、鴨川のすぐうへの、東山一帶を一目に見晴らした座敷の縁側へ出て、川のはうへ背をむけて、うつむいて一心になにかしてゐたが、福助が這入つて來たのを見ると、

「ほう。あんたはんも來てはつたのどすか。さうどすか。それは宜しおしたな。」

やはり、こないだと同じ快活な調子で言つた。

見ると、なにか帳面のやうなものを膝のうへに載せてゐる。

「へつ。これどすか。これ帳面どすがな。店へお出でやすお客さんの顏をかうやつて書きつけときますのや。」

なるほど一枚一枚ひとの顏のやうなものが書いてあつて、それに一一番號が打つてある。

「かうやつて番號を打つときまへんとな。ひよつと間違ふといきまへんやろ。なにせお商賣はお客さんが第一どすさかいな。ちよつと勉强ひてますのや。」

長さんは晴れやかに笑つた。

「あんたはん。何どすてな。近頃はお店へ出といやすさうどすな。」

「へえ。わたいが居んとどむなりまへんさかいな。まあ氣ばつてますのや。割にえろおつせ。」

「そらさうどつしやろとも。そいでもな。何どつせ。あんたはんはやつぱりお店のはうへ

はお出やはしまへんはうが宜しおつせ。」

「さうどすか。わたいが出るのいきまへんかん。」

長さんは惚くりしたやうな顔をして聞いた。

「へえ。お店には番頭はんやら何やらたんとたんと居やはりまつしやろ。そらお任かせやしときやした方がどない宜しか知れまへんえ。」

「さうどつしやろか。店へ出るのいきまへんやろか。」

「へえ。それでは第一てんと若檀那の値打がおへんわ。若檀那はやつぱり奥でちんとしてはらんとあきまへんえ。」

「さうどすか。いきまへんか。」

長さんはちよつと首をかしげて考へてゐた。が、直ぐ、

「さうどすか。そんならもうやめまつさ。あすからお店へ出るのやめまつさ。あんたはんの言ふとほりにしまつさ。」

と、やはり極く快活に笑つてさう言つた。

福助は、あまり素直に長さんが自分のいふことを聞いてくれたので、反つて驚いた。そして、やはり何だかばかに儚なかつた。

しかし、頼まれたことだけは言つて了はないといけないと思つて、

「あんたはんお髭をお生やしやしたんどすな。」

「これどすか。へえ。先度から生やしましたんや。どうどす。これちよつと宜しおつしやろ。」

長さんは軽く髭を撫でて見せた。

「へえ。さうどすけどな。何どつせ。あんたはん、やつぱしお髭の無いはうが好う映りまつせ。」

「さうどすか。これいきまへんか。」

「いかんて事おへんけどな。お商賣人はんはやつぱしお髭の無いはうがおとなしいて宜しおつせ。」

「さうどすか。いきまへんか。」

長さんは復たちよつと考へてゐたが、突然、

「ちよつとお待ちやすや。ぢき來まつさ。」

氣輕にさう言つて、ひよいと座敷を出て了つた。福助はそのとき長さんがどこへ行つたのか分からなかつた。

そこへお父さんが這入つて來た。そして、長さんがもう店へ出ないと言つたと聞いて大層よろこんだ。

「やつぱり、あんたはんで無いとあきまへなんだな。」

さう言つて福助の顔を見た。福助は反つて辛かつた。

長さんはなかなか歸つて來なかつた。小半時間ほどして、そろそろ二人が心配しはじめた頃にひよこりと歸つて來た。

いそいそ座敷へ這入るなり、ちやんと福助のまへへ坐つて、ぬつと顔をつき出して、

「どうどす。これで宜しおすか。ちよつと床屋へ行て來ましたんや。」

長さんは晴れ晴れと笑つた。

福助もお父さんも思はず呆氣にとられて了つた。長さんは綺麗に髭を剃り落してゐるのである。

「もう他にいかんとこおへんか。何なと言うとくれやす。ぢつきに直しまつせ。あんたはんの言ふとほりにしまつせ。」

長さんはいかにも愉快さうに笑つてゐる。

それまで惘れてただぼんやりしてゐた福助は、思はず顔を袖にあてて突つ伏して、ほんとうに聲をあげて泣いて了つた。

夫

婦。

一。

結婚してちやうど一年目に鍾吉は初めて自分の妻が「うけ口」なのを發見して非常に驚いた。

一日、それはちやうど日曜で、ある新聞社に勤めてゐる鍾吉は、久し振りにのうのうと腹いつぱい朝寢をして、起きると直ぐ楊子を銜へて錢湯へ行つて、それから他家ではもう好いかげん午飯ちかい頃にやつと朝飯を濟まして、何だかぼうつと少し勞びれたやうな快い氣持になつて、その儘まだ寢起きのままの丹前姿をごろりと長火鉢のそばへ横にして、兩肱のあひだに顏を挾んだまま、いつか復たうとうとするやうな氣持になつてゐた。

ごとりと緣側へ鋏を置く音にふと眼を明くと、いつの間にか手早く臺所のはうを片づけたらしい妻の里子が、日當りの好い緣側へ座布團を持ち出して、うつむいて熱心に針を動かしてゐる。里子は、まだよそ目にはちよつと分からないが、しかしもう三月だか四月だかの懷

蛭のからだである。

鍾吉は、やはり手枕のまま、物臭さうに片手で枕もとの朝日の袋をひき寄せて、ほかりほかり吹かし初めた。そして、見るともなくそこらに散らばつてゐる赤い小切や、それからいつかもうすつかり所帶じみて了つた妻の樣子やらを眺めてゐた。

ふと氣がついて見ると、妻の下唇が心持まへに突き出てゐる。見てゐるうちに、鍾吉は顏ゐ變な氣持になつた。

「おい。」

とうとう腹這になつて頭を擧げた。

細君は默つて振り向いた。

「なに。」

「うん。お前、も一度横むいて口を噤んで見ろ。」

「何よ。あなた。」

細君は何のことだかわけが分からない。

「うん。何でも好い。とにかく横むいて口を噤んで見ろ。」

「横むいて口を噤れですつて。何なのよ、あなた、一體。」

「何でも好いんだつたら。とにかく横むいて口を噤れと言ふんだ。」

「まあ。變ね。ただ横むいて口を噤れば好んですか。これで好いんですか。」

細君も、はじめは何だかわけが分からず、唯ぼんやり惘れてゐたが、餘まり夫が向なものだから、とうとう言ひどほり横を向いた。

「莫迦。そんな汐吹みたいな口をする奴があるか。ただ當りまへに口を噤れと言ふんだ。」

「だつて、何だかわけが分からないぢやありませんか。これで好いの。」

鍾吉はまた熱心に眺め出した。細君のはうももう動かなかつた。

見ると、細君の唇はやはり下のはうが少し出てゐる。そして、それは單に唇のみならず、下脣全體が宛かもそれを突き出すやうな具合に變に不安定に押し出されてゐる。

「お前、それで當りまへに噤つてゐるのか。」

「だつて、ほかに樣樣がないぢやないの。一體どうしたと言ふのよ。」

「おい。お前、うけ口かい。」
「うけ口。ええ。なぜなの。」
「なぜつて、下唇のはうが出てるぢやないか。このくらゐ出てる。二分くらゐ出てる。」
「だつて、今頃なぜそんな事をお聞きなさるの。あなた今はじめて氣がついたんですか。」
「うん。初めて氣がついた。」
「あら。」
細君は思はず眼を圓くした。
「本當。まさか。嘘でせう。」
「いや。本當だ。お前、まへから受け口かい。」
「まあ。」
里子は、尙のこと驚いて、ただ眼を睜つてゐたが、突然一度に吹き出して了つた。そしてまるで轉がるやうに笑ひ出した。
「あいた。あいた。わたしお腹が痛い。だつて、一年も一緒にゐて女房の受け口に氣がつかないなんて、いくら何だつて。あいた。あいた。わたし、もう。」
とうとう細君は腹を押へて逃げるやうに向うへ行つて了つた。
「うん。少し變だ。」
鍾吉も少し照れて苦笑した。そして、片手の人差指と親指とで短かい兩方の髭をしきりに撫で上げながら呟いた。
「だが、さう言ふものかも知れない。」

二。

鍾吉はまだ結婚まへから可なり長く里子を知つてゐる。鍾吉と里子の兄とは同じ私立學校の同窓の極く親しい間柄で、隨つて鍾吉も里子の家へは可なりしげしげ出入りした。海老茶袴の里子と制服制帽の鍾吉とが、つい往來の眞ん中で出食はして、どつちも少しはにかみながら、しかし極く打ちとけた態度で立話をすると言ふやうな、少し甘いが、しかし極く罪の

ない場面がときどき見受けられた。

そのうち、病氣で一年遲れた鍾吉を殘して置いて一足さきに學校を出た里子の兄は、なにがしの會社へ勤めて、間もなくその支店づめになつて上海のはうへ行つた。しかし、兄がゐなくなつた後も、鍾吉はやはり前と同じやうに里子の家へは訪ねて行くし、おまけにその頃からいつとなく二人は二人きりの手紙をやり取りする仲になつて了つた。

そのうち鍾吉も學校を卒業して、間もなく今の新聞社の口に有りついたが、しかし生來無才無能で人つきが惡く、ただ實直で懶けないだけが取柄だくらゐの鍾吉は、いつまで立つても人並の出世も出來ず、依然として入社當時からそのままの「調査部」と言ふのに居候同樣殘されてゐた。丁度その時、某省の安官吏であつた彼の父親が突然死んで、彼は全く思ひもかけなかつた莫大な負債を一身に背負はされた。當座はさすがに暢氣な鍾吉も、何だか目のまへが眞つ暗になつたやうな氣持がして、もうこれきり自分の一生は滅茶滅茶になつて了つたやうに思つたが、しかし、やはり時日が立つに連れて、次第にそれほどの事もなく、いつか復たまへ同樣ごく暢氣で人の好い元の鍾吉に歸つて了つた。そこで、勇氣を出して、正式

に里子に結婚の申込をした。

ところが、意外なことには、里子の家ぢう擧つてこの結婚に反對した。前から餘り鍾吉が好きでなかつた里子の母親はもとより、二人が唯一の身方だと信じてゐた里子の兄までが、恐ろしくしかつめらしい手紙を里子に寄せて、この結婚に反對した。しかし、何しろ當人同志がばかに熱心で、萬一どうしても許さないなどと言はうものなら、一體なにをし出かすか分かつたものでないと言ふ有樣なので、とうとう最後にみんな折れて了つて、結局二人はめでたく日比谷大神宮で式を擧げた。

しかし、それから鍾吉は、前と違つて、ひどく里子の實家の人達を嫌ひ出した。上海の兄にも、反つて元よりずつと冷淡な手紙しか書かなくなつて了つた。殊に、鍾吉が、ますます親讓りの負債に苦しんで、利子の都合などについ里子の持物なんぞを融通するやうになつてから、一層里子の實家を煙たがつた。里子の實母がたまに訪ねて來たりするのをさへ鍾吉は決して喜ばなかつた。そして、妻がいかにも打ち解けた樣子でいそいそ母親をもてなしてゐるのを見ると、なぜだか鍾吉はひどく腹が立つた。

「おい。お母さんはもう例の着物のことを知つてるんぢやないか。」
その述で、直ぐに鍾吉が苦い顔をしてさう聞いた。
「さうね。事によつたら知つてるかも知れませんよ。」
「知れませんたつて、お前、お前さへ言はなけりや知れるわけは無いぢやないか。」
思はず鍾吉が險しい顔をした。
「だつて、そんなこと自然と分かるもんだわ。」
里子のはうは平氣で相手にしなかつた。

三。

「あなた。」
「……。」
「あなた。」

「うん。」
「お休みになるんですか。お休みになるのなら搔卷を掛けたげませうか。それでは風邪を引いて了つてよ。」
「うん。寢やせん。」
「さう。大丈夫。」
鍾吉は懶るさうに目を明いて、また枕もとの煙草をひき寄せた。細君は針の手を留めてちよつと夫の顏を見てゐたが、直ぐまた爲事にかかつて了つた。細君の言葉は、まへに海老茶の袴をはいてゐた時分と少しも違はず、丸髷を結つてる今も、變に丁寧な言葉とまた變に馴れ馴れしい言葉とがごつたになつて出て來た。
鍾吉はやはり横になつて煙草を喫しながら、また注意して妻の樣子を眺め出した。成ほど一年添つて妻の「うけ口」に氣のつかない俺は確かに頓馬に相違ない。それは毎日毎日いま日には幾回となく見てゐるところの唇である。そして、嘗てはどれだけ彼の心を誘惑したか知れないところの唇である。それにどうして彼は今までそれに氣がつかなかつたのだらう。

鍾吉は、結婚のまへに、迹にも先にもたつた一度、里子と嬉戯したことがある。それはちやうど二人の結婚問題が揉めてゐる眞つ最中のことで、そしてそれは寧ろ里子のはうから進んで落ちあふ機會を作つた或る音樂會を、二人とも中途で出て、そして二人で灯影のない暗い通りを選つて歩いた。いつか二人はそつと寄り添つて、どつちからとも無くこはごは手を握りあつたが、そのとき鍾吉はまるで早鐘のやうに搏つ自分の動悸をはつきり自分の耳に聞いて、つくづく自分の意氣地なしに愛想が盡きた。だが、それは實際鍾吉に取つては曾て覺えのない大冒險だつたのである。

どこか一箇所、兩側ともずつと高い板壁が續いて、それに大きな樹が生ひ茂つて、丸きり人通りのない眞つ暗な所があつた。二人はそこに向き合つて長いこと立ち盡した。

と、突然、

「あなた。あなた。どうぞ私を見棄てないで下さいよ。どんな事があつても私を見棄てないで。」

里子が狂氣のやうに激しく喘いて身を寄せた。鍾吉も思はず誘はれるやうにしつかり里子

を胸に抱きしめたが、すると里子はまるで氣を失つた人のやうに、ぐたりと頭を彼の胸に投げて、そして目を閉ぢた。しかし鍾吉はその大樹の陰の暗闇のなかで、里子のそのじつと閉ぢた瞼のあひだから迹から迹からはふり落ちる大きな涙、それから勻はしい息を吐いて震へ喘いでゐるその唇、それ等を自分の顔のすぐ傍にはつきり見ることが出來た。思はず彼の燃えるやうな唇が彼女の唇を被つた時に、里子はまた更に強く彼にしがみついて、そして突然聲を立てて激しく泣いた。――――――

その唇である。その唇が「うけ口」だつたのを彼は今まで知らずにゐた。見ると、その唇だけは、今もまだ昔のままに、特に所帶に疲れて色のあせた模樣もなく、むつちり可愛い二つの肉を重ねて、殊にその心もち突き出てゐる下唇は、彼女の幾らか曲つた鉤鼻と、それから女に似合はず柔かい毳の生えた、そしてときどき彼女が彼の剃刀を借りて器用な手付をして剃つて得意になつてゐるところのその上唇とを、まるで受けるやうな恰好に、しかもその突き出てゐるのは下唇だけでなく、腭から、耳のあたりから、首筋から、言はば顔全體がその「うけ口」と一分一厘動かすことの出來ない或る均格を保つてゐるやうな、いや、好く見

れば、その柔かい少し癖のある髪の毛や、女にしては少し高すぎると思はれる位すんなりしたその細身の姿まで、何だか彼女の總てがその受け口一つに支配せられてゐるやうな氣さへするのである。それに、どうして彼はこれまでこの自分の妻の一番大きな特徴に氣がつかなかつたのか。

だが、考へて見ると、彼は近ごろ單に唇だけでなく、妻の總てがどうも好く分からない氣になつてゐる。……

「あなた。唯物史觀て一體なんのこと。」

いつか縫つてた切をわきのはうへ押しやつて、熱心に新聞を讀んでゐた里子が、突然彼のはうへ振り向いた。

「何だい。出し抜けに。」

「でも、ここに有るのよ。餘剰價値て一體なに。」

「さうさな。餘剰價値。」

實は鍾吉もよく知らなかつた。

「何でもプロレタリアが働いたものをブルジョワが搾取すると言ふことだ。」

「さう。」

細君もたつて聞かうともしなかつた。

「うん。里子。俺は近頃どうもをかしいと思ふのだがね。そら。ブルジョワ、プロレタリアと言ふだらう。」

「ええ。」

鍾吉も何だか俄かに元氣づいて、體を起こして坐り直した。しかし片手に挾んだ卷煙草だけは依然として放さない。

「では、俺達はそのどつちだい。」

「それは無論プロレタリアだわ。」

「さうかい。だつて、俺達よりもつとみじめな暮らしをしてゐる人間だつて、どれだけ有るか知れないぢやないか。」

「ええ。でも、プロレタリアつて一番貧乏てことぢやないんでせう。」

「うん。だが、俺はどうも變だと思ふんだね。見たとこ俺達よりもつとひどい貧乏人がどつさり有るだらう。ところが、本當はそんな人間のはうがずつと金持なんだぜ。だつて、そんなやつは俺なんぞのやうに大きな借金なんぞ背負つてはゐないんだぜ。だから、せつせと働いてゐる中にはいつかはブルジョワになるかも知れないやな。ところが、俺なんぞは、これから一生いくら稼いだつて、借金の減りつこは無いんだぜ。やつとこ利子だけ入れて行くのが關の山で、借金はますます殖える一方さ。全く柊揆の川流れだ。」

「なに。柊揆の川流れつて。」

「うん。頭の擧がる瀬がないと言ふことよ。」

「ああ。さう。」

里子も思はずにつこりした。

「それ洒落。」

「うん。寄席で聞いて來たんだ。だからね。つまり俺はブルジョワ、プロレタリアのほかに、も一つマイナス・ブルジョワと言ふのが有つても好いと思ふのだね。」

「何です。マイナス・ブルジョワつて。」

「そら。トランプのマイナスさ。スペエドのマイナスよ。つまりプロレタリアのも一つ下のやつだ。」

「ああ。さう。その事なの。」

夫婦は、所在なくなると、好く二人きりでトランプをやる。そして勝つた方が負けた方の鼻を撮むことに極めてゐた。里子はこの負けて鼻を撮まれるのを何よりも口惜しがつた。外でぽぽうと喇叭の音がする。

「あ。豆腐屋さん。」

里子はあわてて駈け出した。

四。

だが、とにかく彼等二人は、どこから見ても睦じい夫婦に違ひなかつた。鍾吉には唯だの

一人も友達らしい友達も、また親戚らしい親戚もなく、夫婦はお互ひ同志に、ただその自分の妻に、自分の夫に縋り切つてゐた。

「社では俺はよくよく吝なやつだと見られて、どうも評判らしいよ。」

一日、鍾吉が言つた。

「さう。どうして。」

「うん。何かあつたつて、俺は滅多に一緒に行かないからね。もう俺だけはのけ者にしてゐるやうだ。いつか臨時賞與のあつた時に、みんなでさんざカフェエか何かで飲んだ擧句、吉原へ押し出したが、その時も俺だけには何とも言つて來なかつた。」

「さう。そんな事があつたの。」

「うん。よくよく見切りをつけられてゐるらしい。結局、こつちはその方が好いがね。」

「でも、やつぱり附合だけのことはしないと具合が悪いんでせう。さうやつて一人のけ者にされてちや、やつぱり困ることがあるでせう。」

「なに。さうでもない。」

「でも、やつぱりそれは好くないわ。あなた、これから入らしつたはうが好いわ。」

「ふふん。どうかお仲間にお入れ下さいつてか。女房がしきりにさう言ふもんですからつてか。」

「ほほほ。でも、そのはうが好いわ。」

すると、里子がまた眞面目な顏をして言ひ出した。

「でも、無理はないわね。皆さん誰も御存じないのでせう。私たちがこんなに苦勞してるつてことは。」

「それは無論知らないさ。だから、ただ吝なやつだと思つてるんだ。だが、やつぱりさう言ふことは性分のものなんだね。いつもきゆうきゆう言つてる癖に、すぐ待合なんぞへしけこむのがある。社へ意氣な黑襟かなんかで拂ひの催促に來ても、一向平氣なもんだ。かへつて自慢のやうに言つてゐる。」

「さう。そんな方もあるの。」

「うん。そんなやつにかかつたら俺なんぞはひどいもんだ。家庭耽溺だと言つてる。」

「まあ。」

細君は思はず顔を赤くしたが、しかし直ぐひどく厭やな顔をした。

總體、鍾吉は近ごろ萬事につけて細君に押され氣味なのを私かに感じてゐる。それは鍾吉の無能や貧乏や、または生理的にも強くないことや、いろいろ原因があつたが、特に鍾吉が萬事につけて頓馬で氣が利かないのに反して、里子のはうは萬事てきぱきと要領の好いのがその一番の原因であつた。

「あなたつたら、それはずゐぶん暢氣なのよ。私どんだけ冷や冷やしたか分からない。」

ある時、細君が眞面目とも笑談ともつかない調子で、にやにや笑ひながら言ひ出した。

「ねえ。そら。あの頃あなた頻りにうちへ入らしつたでせう。お母さんなんぞ、それは目に見えて厭やがつてゐるのに、それにあなたつたら丸きり御存じなしなんですもの。さうかつて、まさかに私からはさうも言へないし、私なかに這入つてそれは一人でずゐぶんと氣を揉んだわ。」

鍾吉は、思はず顔を眞つ赤にして、憤るにも憤られず、ただ一人へどもどした。それと見

て、つい心やす立てに言ひ出した細君のはうも反つて困つて、これもやはり眞つ赤な顔をして弱り拔いた。

しかし、それ以來、鍾吉は、自分でも夫としての威嚴をすつかり失墜して了つた氣持がした。そして萬事につけて變に引目な氣持が增して來た。

「おい。けふは面白いものを見て來た。」

一日、鍾吉が社から歸つて來た。

「お歸んなさい。けふは遲いんですね。」

「うん。途中で救世軍に出逢つてね。大道演說を聞いて來た。面白かつたから、暫らく一緒について廻つた。」

「まあ。」

さすがの細君も驚いて夫の顏を見返した。

「ずゐぶん暢氣ねえ。」

「でも、面白かつたよ。俺なんぞもこれで自分が煙草をどれくらゐ喫むかと言ふことを初

めて敎へて貰つた。この朝日を一日二つと見て、四十年喫むとするんだね。それをずつと上へ積み上げるんだ。お前、どのくらゐの高さになると思ふい。」

「知らないわ。そんなこと。」

「何でも富士山よりずつと高くなるんだぜ。」

「まあ。そんなに高く。本當でせうか。」

「本當だとも。それから、そのニコチンで鷄を殺すと、十三萬何千羽とか殺せるさうだ。そして、もしか日本の喫烟者が一日殘らず烟草をやめると、軍艦が何艘とか出來るんだ。」

「さう。隨分のものね。それで、あなた、烟草をよす氣になつたんですか。」

「いや。ならなかつた。俺の喫む烟草もそんなに大したものかと思つて、大いに感心しちまつた。」

「おほほ。それぢや何にもならないのね。かへつて奬勵するやうなものね。」

これまで鍾吉は何よりも斯ういふ話をするのが好きであつたが、それが近頃は了ひにきつと里子が「隨分ね」と言ふか、或はさうは言はなくとも、彼にはどうもさう言ふ幾らか皮肉

な顏に見えて、せつかく勢こんで話してゐたのが、いつも途中で變に挫けて、妙にこだはつた氣持に變つて了ふ。

五。

そのうち次第に寒くなるに連れて、暢氣な鍾吉も遉にだんだん今年の暮れが氣になり出した。どう考へて見たところで、どうしてもまともに節季の越せやうがなく、幾らやり繰つて見たところで、全體の利子だけの工面がどうしてもつかなかつた。そこへ持つてきて、來年は赤ん坊が生れる。考へ出すと、鍾吉もついつい夜の寢られぬやうなことが多くなつた。夜なかにふと目の明いた折なんぞ、何だか思ひもかけぬ怖ろしい不安な氣持に襲はれて、思はず身も世もあられぬやうな思ひがする。

ところが、不思議なことには、鍾吉がさうして寢床のなかで思案にくれてゐるやうな時には、里子のはうも、きつと傍の寢床で寢ぐるしがつて幾度も寢返りをした。

「おい。」

「ええ。」

「起きてゐたのかい。」

「ええ。だつて、寢られやしないわ。」

鍾吉は、ぱつと燐寸を擦つて烟草に火をつけた。細君の大きな眼がちらと見えたかと思ふと、また直ぐ闇のなかに消えて了つた。ただ烟草の灯だけがほうつと赤い。うしろの鍛にざあざあ雨の音がする。どうやら風も少しあるやうだ。

「ひどい雨だね。」

「あなた。この按排では、あすもまだきつと雨よ。」

「うん。爲方がない。和服で行かう。」

鍾吉の後にも先にもたつた一足しかない靴が、いつか底が傷んだと見えて、雨の日にはどこからともなく水が滲みこんで來る。

「これで、この雨が上つたら、きつとまた急にどつと寒くなるのよ。」

「うん。これからもう寒くなる一方だ。一雨一雨さむくなる。」

またほうつと烟草の灯が闇のなかで赤く見えた。

「心細いわね。さう思ふと。」

「お前、近ごろ夜よく寢ないやうだね。」

「さうでも無いわ。でも、いろいろ氣にかかる事もあるから。」

暫くどつちからも何とも言はなかつた。雨戸にざあつと雨のあたる音がする。また少し風が出たと見える。

「あなた。あの、私のお産のことは好いのよ。私、お母さんにさう言ふから。」

鍾吉はちよつと返事をしなかつた。

「お母さんにお金を借りるのか。」

「ええ。だから、大丈夫よ。」

「お母さんに借りるのは廢せ。」

鍾吉は闇のなかで顔を顰めた。

「そんなら何かほかで工面が出來て。」

暫くしてから里子が聞いた。しかし、今度は鍾吉のはうが何とも言はなかつた。

實は鍾吉自身も、ずゐぶん自分の無能には愛想もつかし、また心から悲しんでもゐるのである。出來ることなら、何とかして自分もいま少し有能な人間になり、細君の信用も博し、實家へもそれ見たことかと見返してやりたい氣はもとより山ほどある。だが、どうもそれはそれほど切實に迫つて來ない。それだからして今度は一つ奮發して斯うして見ようと言ふ氣には、ついぞまだ一度もなつたことが無い。さう思ふ氣持は、直ぐまたそのあとから、いやいや、俺のやうな人間はやつぱり駄目だ、やつぱり俺なんぞは、世間からも女房からも、在らゆる人間から輕蔑せられ無視せられて、傷なく一生を送るのだ、つまりさう言ふやうに出來てゐるのだと、直ぐにさう言ふ氣が下から湧いて來て、またすつかり悲觀して了ふ。

とにかく鍾吉は、近ごろ妻の里子に對して、變に一目置いた氣持がし初めた。どうかすると何だか自分の姉かなんぞのやうな氣のすることさへある。「駿馬痴漢を乘せて走る。」實際さ

う言ふ氣持がしてならない。そしてときどきは、あの萬事勝氣で押しとほしてゐる里子が、よくこんな自分のやうな愚圖の所で辛抱してゐるもんだと不思議な氣になつた。しかし、里子の樣子を見ると、格別彼の所へ來たのを後悔してゐる模樣もない。考へて見ると、何だかわけが分らなかつた。結局、鍾吉は、夫婦なんて變なもんだと思つた。

一體、里子は俺のどこが好かつたのだらうと、鍾吉は一度考へて見た。だが、振り返つて見て、いくら最眞目に見たところで、鍾吉はどこに一點、自分で自分に自信の持ちやうがなかつた。ただ僅かに、小柄で纖細な、里子よりももつと女らしい體つきと、それから、柔くて癖のない黑い髪の毛があるに過ぎなかつた。鍾吉はただ苦笑した。

「おい。お前、俺のところなんぞへ來たのを後悔しはしないかい。そんな氣は起こらないかい。」

ある時、鍾吉が籤から棒に言ひ出した。

「なぜそんなことをお聞きになるの。」

里子は思はず驚いて顏を擧げた。

「うん。まあ念のために聞いて見るんだ。どうだい。そんな氣になつたことはないかね。」
だが、實は鍾吉はしごく眞面目であつた。
「おほほ。今さら後悔して見たつて、どうにも爲樣がないぢやないの。」
里子はただ笑つて相手にしなかつた。

六。

まだ結婚しないまへ、二人とも熱心な文學の愛好者であつた。毎月の雜誌の創作欄や、めぼしい新刊物は、二人とも大抵のこらず目を通して、そして互に本を貸したり借りたりして讀みあつた。二人の趣味も大體一致して、『白樺』の作家、なかでも武者小路實篤や倉田百三や有島武郎や、それから島崎藤村、谷崎潤一郎、菊池寛、永井荷風、そんなのが二人の愛讀する共通の作家で、さう言ふ人達の作品は二人とも殆ど一つ殘らず讀んでゐた。そして、二人でさう言ふ話をしあふのを何より樂しんで、隨つてまた二人ともなかなかそのはうの通

であつた。
「『白樺』が初めて出たころ、正親町つて人がゐたの御存じ。」
「ええ。兄弟でせう。」
「ええ。あの方どうなすつたんでせう。わたし初めあの方の書くもの一等面白いと思つたんですよ。」
「さう。どうしたんですかね。もうまるで見ませんね。なんでもお父さんが宮内省のお役人か何かだつたんでせう。」
「おや。さうなんですか。」
「さうですね。あの頃となら『白樺』もまるきり變りましたね。里見弴なんて人が頻りに飜譯をやつて居ましたつけね。」
「それから長與さんが赤澤仲次つて名前でずゐぶん盛んなものを書いて入らしたでせう。」
「さうさう。僕も確かはじめて吉原へ行く小說を讀んだつけ。」
よく二人でそんな話をしあつて喜んだ。ことに依つたら、それが二人のかうして結婚して

了ふことになつた一番大きな原因だつたかも知れないと、或るとき鍾吉は考へた。が、その頃からどうも里子のはうが小説なんぞを讀んでも見方が俺よりも鋭かつた、とまた鍾吉が考へた。……

ところで、一度結婚して了ふと、二人とも急にひどく文學に冷淡になつた。毎月の雜誌なんぞも、もう一向熱心に見なくなつて了つた。新刊の單行本なんぞは殆どもう手にも取らない。それは今は雜誌一つ買ふにも一一考へなくてはならないやうな境遇ではあるけれども、しかし、決してそれがその主な原因ではない。その證據には、單に文學だけでない。芝居へも、音樂會へも、活動寫眞へも、また美術の展覽會へも、二人とも殆どもう丸きり行かなくなつて了つた。しかもそれが、決して行けないから行かないのでなくて、二人とももう丸きり行く氣が起こらないのである。

「あなた。今日は一つ散歩でもして入らつしやいよ。天氣も好いし、紅葉でも見て入らつしやい。」

「うん。」

たまの日曜に細君がさう言つて勸めても、鍾吉は生返事ばかりして、決して出かけようとはしない。

結局やつぱり久しぶりに悠くり湯に這入つたり散髮をしたりしたあとは、大抵一日針仕事をしてゐる細君のそばに寢そべつて、折角の日曜を潰して了ふ。

「あなた近頃ずゐぶん何にでも氣がなくなつて了つたのね。」

ある時、細君がまじまじ鍾吉の顏を見ながら言つて笑つたことがある。

「おい。チエエホフがさう言つたさうだ。人間は結婚して了ふと、何にも興味を失ふもんだつて。」

「さう。」

一日、夕飯の食卓で突然鍾吉が言ひ出した。

「うん。けふ社で見た本にさう書いてあつた。」

「それで、あなた、大いに感心しちやつたんですか。」

「うん。感心した。確かにさうに違ひない。」

鍾吉はまじめな顔をして勢よく茶漬を掻つこんだ。

七。

「おい。けふは谷崎が社へやつて來た。」

一日、鍾吉が元氣よく社から歸つて來た。

「おや。さう。潤一郎さん。」

「うん。今度うちの新聞へ長篇を書くんだつて。」

「さう。谷崎さんなら好いわね。いつからでせう。」

「さあ。いつからになるか。何でもいまの徳田秋聲のが濟んだら、その迹へ出るんださうだ。何でもばかに長いものだと言つてたつけ。」

「さう。何て題。」

「さあ。何て題だか、題はまだ極まつてゐないやうだ。」

ほんとうは題も聞いたのだが、鍾吉がついうつかりして忘れて了つたのである。

「それで、どんな人でした。立派な人。」

「うん。さう大して立派ぢやなかつた。」

鍾吉のはうは谷崎、菊池、武者小路と殘らず呼び棄てにしてゐるが、里子のはうはこれはいつでも谷崎さん、菊池さんとさん附けにしてゐる。鍾吉は常から何となくそれが氣持がよくなかつた。

それでも遺に里子のはうは、今でもまだ鍾吉の社の新聞に出る小說だけは、講談と一緒に毎日缺かさず讀んでゐる。ところが、當の鍾吉はそれさへもう殆ど讀まなくなつた。

「俺はこれで一時文士にならうかと思つたこともあるんだぜ。」

「おや。さう。」

里子は思はず不思議さうに目を睜つた。

「うん。一時はずゐぶん熱心に小說を書いた。」

「あら。あなたが。さう。面白いわね。一體いつ頃のことなの。」

「いつ頃つて、それはもう隨分まへさ。」
「どこかへお出しになつて。」
「うん。『文章世界』へ投書したら、二度とも藤村の選で一等になつた。」
「偉いわね。さう。その『文章世界』いまでもあつて。」
「さあ。あるかも知れない。いや。無いかね。何しろもう隨分まへだから。」
「見たいわ。ねえ。あなた捜しませうよ。ねえ。今度の日曜に捜しませうよ。」
鍾吉はただ苦笑して髭を捻つたが、今さら得意だとも極まりが悪いともどつちとも知れない一種妙な氣持がした。
「でも、あなた、なぜ今まで隠して入らしつたの。早くさう仰しやれば好いのに。」
「隠してなんかゐるもんか。ただ言ふ必要がなかつたんさ。そんなこと言つたつて爲方がない。」
「で、島崎さん何て言つたんです。褒めたんですか。」
「うん。ばかに褒められた。さうさ。何と言つたつけかな。何でも、この作者は非常に素

直な見方と獨特のユウモアとを持つてゐるから有望だとか何とか、まあそんな事だつた。」
「さう。でも、島崎さんに褒められたのは偉いわね。なぜ、續いてお書きにならなかつたの。」
「うん。書かう書かうと思つてるうちに、ついその儘になつて了つた。」
ふと鍾吉は、も一度自分が小説を書いたら一體どうだらうと考へて見た。そしたら、思はず何かに唆かされるやうな不思議に乘氣な氣持になつた。
「おい。これから俺がまた小説を書いたらどうだらう。」
「おほほ。お書きなさいよ。きつと面白いから。」
しかし、鍾吉には細君は一體まじめなのか、それとも笑談なのか、好く分からなかつた。
だが、鍾吉は書いたら書けさうな變に頼もしい氣持がした。

八。

その前にいちど二人はこんな會話を交したことがある。

「あなた。いま『主婦の友』に出てる『破船』ね。」

「『破船』。ああ。久米正雄の。猫の子に振られた話だらう。」

「ええ。あれね。原稿料一枚十圓ですつて、一月八十枚の八百圓ですつて。」

「へえ。さうかね。月八百圓はすばらしいね。しかし本當かなあ。嘘八百圓ぢやないか。」

「まさか。でも、文士つて、ずゐぶん儲かるものなんですね。わたし驚いちやつた。」

「うん。何でも菊池寛の毎月の收入が總理大臣と同じくらゐださうだ。倉田百三はもつと上だつて。何かに出てた。」

「まあ。そんなんでせうか。隨分偉いのね。」

鍾吉はふとまたそれを想ひ出した。同時に、たしかあの時『文章世界』から五十圓貰つた

つけと思ひ浮かべた。萬一、五十圓ふいに這入つて來たら、今だつてそれはどんなに助かるか分からない。第一、雨の日にも水の滲み込まない新しい靴を買ふことが出來る。鍾吉は例のとほり朝日を銜へながら、思はず一人考へ込んだ。

成程さうに違ひない。俺だつてあの時もし一心に創作を續けてゐれば、或は今ごろはもう立派に一人まへの作家として通用してゐたかも知れないのだ。人間の才能なんて、考へて見れば、全くきつかけ次第で實はどうにでもなるもののやうな氣持がする。惜しいことをしたもんだ。行つても行かなくても、やつて見れば好かつたんだ。よしんば失敗したところで、少しも損の行かないことだつた。そして萬一うまく行けば、今頃はまう大名をなして、女房にも大きな顔をしてゐられたかも分からない。そしたら、實家からも見くびられずに濟んだらう。借金なんぞは僅か一年の收入で以て直ぐに拂つて了へるところだつた。ただあのとき俺がそれほど乘氣にならなかつたのがいけなかつたのだ。つまり、そこが俺の愚圖たる所以なのだ。總じて創作なんと言ふものは、難かしいと言へば難かしい代りには、また人によつてはさう難かしいものでは無いかも分からない。現に、あの時、俺は大して努力もしずに唯

だすらすらと書いた。そしたら、藤村がひどく感心して、一種獨特の妙味があると言つた。珍らしいユウモアの持主だと感嘆した。ユウモア。なるほど、これが俺のずゐぶん大きな持物だつたかも分からない。なるほど、いま考へて見ても、あのとき俺が書いたやうな味はひは、漱石のやうなのとも違へば、また、今の宇野浩二のやうなのとも違つてゐる。さう思ふと、いま初めて藤村が珍らしいユウモアの持主だと言つた意味が分かるやうな氣持がする。大いに有望だと言つた意味も分かるやうな氣持がする。少くとも、大作家島崎藤村が立派に俺に作家としての保證をつけてくれたのだ。何と言つたつて、藤村は偉大な作家だらう。鈴も上なら、ぐつと苦勞もしてゐるだけに、谷崎や武者小路や菊池寛などとは比較にならない大作家だらう。その藤村が保證したと言ふことは、つまり俺に谷崎や武者小路と同等か、或はそれ以上になれる天分があると言ふことだつたのだらう。それに、俺が頓馬で、その折角の保證をつい無駄にして了つた。全く惜しいことをしたものだ。だが、考へれば、それは今からだつてまだ遅くはない。その保證は、今でもまだ取り消されたわけでも何でもない。書かうと思へば、これからだつて書けるのだ。それに萬一これから書くとすれば、それは固よ

りあの頃とは比較になるものでない。第一、氣持からして違つてゐる。書くなら、それは無論こんどは命がけだ。あんな好い加減な氣持で書きはしない。

鍾吉は、煙草の火の消えたのも忘れて、冷たくなつた吸殼を銜へたまま、一心に考へこんだ。考へてゐるうちに、彼は近ごろついぞ覺えたことのない一種不思議な或る生き生きした興奮が體全體に漲つて來るのを感じた。

さうだ。確かに創作は好い。第一、俺は小學校時代からこれと言つて何一つ得意なものの無かつた男だが、ただ一つ作文だけは、そもそも小學校の突き出しからして終始一貫、最後まで上成績で通して來た。俺には或はさう言ふ一種特別の才能があるのかも分からない。ただ俺が持前の頓馬から、自分でそれに氣がつかずにゐるのかも知れないのだ。なるほど、考へて見れば、今の文壇なんぞ隨分下らないものも有るやうだ。こんなものなら俺にだつて書けると思ふものが幾らもある。俺が書いたら、もつと旨く書けると思ふやうなものも少くない。一心にやりさへしたら、俺だつて隨分一人まへにはなれさうだ。旨く行けば、やつてるうちに、つい自分でも驚くやうな才能が現れて、一流中の一流とならないとも限らない。

とにかく、旨く行けば、それが俺の一生を根柢から變へて了ふ大きな動機になる。考へて見れば、一生新聞へ勤めて暮らすなんぞ莫迦げた話だ。一生借金の利子を拂つて暮らすなんて、凡そこんな莫迦莫迦しい話はない。これは一つ考へ所だ。

と、丁度そのとき大阪朝日で懸賞の短篇を募集してゐたのをふと想ひ出した。すると、突然、何だか彼の體のなかの總てのものが一度に目を覺ましたやうな氣持になつた。さうだ。先づ驗めしにあれに書いて見たらどうだらう。これからだと、まだ十分に暇がある。思はず鍾吉はがばりと跳ね起きた。

「おい。里子。里子。手拭を取つてくれ。湯へ行つて來る。」

湯へ行く途中も、それから湯船のなかへ浸かつてからも、彼はもうその事ばかり一心に考へ續けてゐた。そして、まへの投書家時代に書きかけてついその儘になつて了つた二つ三つの作品の構想やら、それから、

「へえ。あの男がそんなものを書いたのかい。さうかね。人間て見かけによらないもんだね。」

そんなことを言つて事の意外に驚いてゐる同僚の社員の顔やら、そんなものが一度に生きと彼の頭のなかで錯綜した。

九。

「おい。これから少し忙しくなる。」

一日、鍾吉が元氣よく社から歸つて來た。

「さう。どうかしたんですか。」

「うん、少し爲事が出來た。少し社の原稿を書かなくちやならない。これから夜も爲事が出來た。」

「さうですか。」

「うん。面倒臭いが爲方がない。しかし、なに、ぢき濟んで了ふ。」

だが、鍾吉は何となくうしろめたかつた、言葉の調子に嘘を吐いてるのがちやんと自分で

感じられた。しかし里子は格別なんとも言ひはしなかつた。ただ近ごろ總てが珍らしくはきはきして來た鍾吉の顔を不思議さうに眺めてゐた。

元來、鍾吉は、大の寢坊であつた。時間勤めをする身の已むを得ず、しぶしぶ床を離れたが、しかしちやんと時間に間に合ふやうに起こすのには細君は毎朝ずゐぶんと手こずつた。

「わたし實際氣の毒でしやうが無いのよ。だつて、やつと起きて手水を使ひに行く時のあなたの不機嫌たら、そりや全く無いんですもの。」

いつも細君が弱つてゐた。隨つて、夜は朝を氣にして人一倍はやく寢た。夕飯を濟ましても、ろくに散歩もしない。長火鉢のそばで細君と少し無駄口を利いたかと思ふと、直ぐ、

「寢よう。寢よう。起きてゐたつて爲方がない。明日(あす)また早いんだ。」

さう言つて、まだ何か爲事を膝のうへに載せてゐる細君をほつたらかして、一人さつさと先へ寢た。そして、床へ這入るが早いか直ぐにぐうぐう寢こんで了つた。

「能くあんなに早く寢つかれるものね。いま寢床へ這入つたかと思ふと、もう鼾が聞こえてゐるのよ。」

近ごろどうも好く寢られない里子がいつも羨ましがつた。

「それがお前、健康の第一の證據なんだ。夜よく寢られなくなつたら、本當はもうどこか悪いんだつてことだよ。」

鍾吉は反つてそれを得意にした。

ところが、それが近頃大いに變つて來た。夕飯を濟まして二三本煙草を吸つたかと思ふと、直ぐに奥の自分の部屋へ這入つて、何か一心に書き出した。

「あなた。まだお休みになりませんか。」

「うん。もう直ぐだ。もうちよつと待つて呉れ。」

反つてさう言つて細君に促がされるやうになつた。朝だけは相變らず起きにくかつたが、しかしそれも、一度起きて了ふと、もう前のやうに不機嫌な顔なんぞしないで、さつさと元氣よく社へ出かけて行つた。とにかく、總てに亘つて鍾吉の生活は突然目立つて生き生きと彈力を帶びて來た。殊に、日曜の朝までさつさと起きて爲事にかかつたのがすつかり細君を驚かして了つた。

「あなた近頃よつほどどうかして入らつしやるのね。私なんだか氣味が惡い。今年はきつと特別に寒いのよ。」

一日、とうとう里子が笑ひながら言つた。

「うん。何しろ俺ももう間もなくババだからね。さうほやほやもしてられない。」

鍾吉も元氣よく笑つたが、しかし何となく具合が惡くて、まともに細君の顏をよう見なかつた。

「あなた。もう餘つほど出來て。」

「え。何だい。」

一日、突然細君に聞かれて、鍾吉は思はずどきりとまごついた。

「そら。例のお篤事。もう餘つほど出來て。」

「うん。あれか。うん。少し出來た。」

しかし、鍾吉は細君のその探つたいやうな目のうちに、或る惡意のある微笑を讀んで、何

だかひどく厭やな氣持がした。そして、一體里子は俺が小說を書いてゐるのを知つてゐるのかしらんと考へて見た。そしたら、あの何にでも機敏な里子が氣のつかない筈はないと言ふ氣がした。そして、初めからさうと無造作に明かし得ない自分の意氣地なさが、今更ながらいかにも情なかつた。

だが、しかし鍾吉は熱心に書き續けた。すると、書いて行くうちに、どう言ふものだか、段段に氣が拔けて行つた。何だか最初書き出した頃の勢はいつの間にやら消へて了つて、變に莫迦らしい氣が勝つて來た。どうかすると、机に向つて坐つたまま、ぼんやり丸で似てもつかぬ事に思ひ耽つてゐるやうなことが多くなつた。そして、思はずはつと我に返つて、驚いて、これではいけないと無理やり筆を執つたが、すると、久しいあひだ忘れてゐた或る努力の心持が非常に珍らしく愉快に感じられた。が、しかし唯だそれだけで、作品のはうはやつぱり格別さう氣が乘らなかつた。筆を執りはじめた頃に感じた、きつと傑作の出來さうな確信は、今はもうすつかり消えて了つて、今では何だか前に書いた頃のはうがずつと旨かつたやうな、變に心細い氣持になつた。そして、さう思ひ出すと何だかひどく莫迦莫迦しくな

つて、何度もいつそ止めて了はうかと言ふ氣に襲はれた。

だが、鍾吉はやつぱり書き續けて行つた。一月あまりすると、それでも、とうとう初めの下書が出來上つた。鍾吉は思はずほつとした。そして直ぐに淨書にかかつた。締切はもう目のまへに迫つてゐた。

十。

「あなた。小説を書いて入らつしやるのね。」

一日、日曜の朝、鍾吉が例のとほり早く起きて食事をしてゐる時に、突然細君が言ひ出して鍾吉を驚かした。

「お前どうして氣がついたい。」

鍾吉は思はず顔を赤くしてまごついたが、しかし、いつもに似合はず直ぐ落ち着いて、だが、やはり何となく極まり惡さうに微笑しながらさう聞いた。

「それはあなた分かるわ。私まへから知つてたわ。」

「さうかい。どうして分かつたい。」

何かまるで機嫌でも取るやうな調子で鍾吉が聞いた。

「だつて、私、毎日あなたよか二時間も先に起きてるぢやないの。隱したつて駄目よ、あなた。いつでも見られるわ。」

ああ、さうかと、鍾吉は初めて思ひ當つた。そして、今まで丸きりそれに氣のつかなかつた俺はやつぱり頓馬だとまた更めて考へた。

だが、鍾吉はいつもに似ず機嫌が好かつた。それに、いつからか氣になつてゐたこだはりがさらりと取れて、何だか一度に肩の重荷が下りたやうな氣持がした。

「お前、讀んだかい。」

何だかひどく氣の引けるやうな顔をしながら、鍾吉が妻に聞いた。

「ええ。少し讀んだわ。好いでせう。いけなかつて。」

「いけなか無いさ。で、どうだつたい。詰まらなかつたらう。」

鍾吉は顔を眞つ赤にした。そして、一體妻が何と言ふか、思はず胸がどきどきした。
「そんなことは無いわ。なかなか面白かつたわ。」
「面白かつた。へへ。こいつお世辭を言つてやがらあ。」
いくら咏へても、思はず鍾吉は笑み零れて了つた。
「あら。お世辭ぢやないわよ、あなた。全くよ。私あなたがあんなもの書かうとは思はなかつた。」
「へへ。あんなこと云つてやがらあ。莫迦だなあ、こいつ。」
鍾吉はいくら辛抱して見ても自分で自分の相好の頽れて了ふのが好く分かつた。
「でも、まだ直すんでせう。」
「直すとも。まだ丸きり變へて了ふんだ。」
「それで、あなた、どこかへお出しになるつもり。」
「うん。出さうかと思ふんだがね。どうだらう。駄目かね。」
「そんなこと無いわ。駄目なんて。でも、何か傳があつて。」

「里子。實は少し金儲けを考へたんだ。」
「金儲け。」
「そら。例の大阪朝日の懸賞ね。あれに出さうかと思ふんだがね。尤も、まだはつきり極めたわけぢやない。」
「ああ。さう。さうね。あれなら好いかも知れないわ。」
「あれなら」と言つたのが何となく鍾吉の氣に入らなかつた。
「なぜだい。なぜあれなら好いんだい。」
「だつて、あなた。」
細君は笑つて答へなかつた。ただ迹から、
「でも、せつかくお初めになつたんだから、一所懸命おやんなすつた方が好いわ。」
とさう言つた。

とうとう鍾吉は書き上げて了つた。

或る土曜日の晩はやくかかつて、翌日ひがしの空のしらしらする頃にすつかり淨書をしあげて了つた。

その晩は里子もやつぱり一緒に徹夜した。鍾吉は好いからお前は先へ寢ろと言つたが、しかし、爲掛けた爲事をしまひたいからと言つて、やつぱり次の間でせつせと針を運んで、睡い顔一つしなかつた。そして、やつぱり鍾吉にも結局はそれが一番のたよりのやうな氣持がした。で、一所懸命に書いた。すると、一心に書いてゐるうちに、自分もまだこれだけ努力の出來る男だと思ふことが、何だかすつかり嬉しくなつて了つた。そして、初めはその積りでも無かつたのが、とうとう徹夜して書き上げて了つた。實は鍾吉は、これまでついぞ試驗まへにも徹夜なんぞしたことのない男であつた。書きながら、ふと東の空の白んだのに氣がついた時には、何だか未だ曾て覺えたことのない、何か或る偉大な事でもしたやうな、すつかり淨淨しい氣持になつて了つた。

「出來た。出來た。」

鍾吉は原稿の束を抱へて勇躍して次の間へ飛び出した。

「あら。出來たの。」

里子も思はず目を輝かして夫の顔を見上げた。

「好かつたわね。」

「ああ。勞びれた。勞びれた。もう懲り懲りだ。二度とこんなことやるもんぢやない。」

鍾吉は快心の笑を浮かべて里子を顧みた。

「勞びれたでせう。でも、本當に好かつたわね。早くお休みなさいな。」

「うん。寢よう。お前も疲れただらう。早く寢ろ。」

着物を着替へて床に這入つた時には、反つて何となく興奮して目が冴えて、いつになく眠られさうにない氣持がしたが、しかし、結局それはほんのちよつとの間で、すぐ例のとほり前後も知らず高鼾で寢込んで了つた。

翌日、鍾吉が起きたのはもう午ちかくであつた。里子はちやんと食事の仕度をして待つてゐた。

「おい。お前、ばかに早く起きたんだね。」

「さうでも無いわ。」

里子は淋しく苦笑したが、その顔は何となく蒼かつた。鍾吉は、ひよつとしたら里子はあれからあのまま寢なかつたのぢや無いかしらんと思つて、そつと見ぬやうに横から樣子を伺つた。しかし、口に出しては何とも言はなかつた。

さて、起きて見ると、鍾吉は何だかぽかんとして、まるで莫迦のやうな氣持がした。そして、ゆうべ徹夜して書き上げた作品なんぞ、好いとも惡いとも丸きり見當がつかなかつた。

「あなた。これもう綴ぢて好いんですか。」

やがて里子がその原稿の束を鍾吉のまへに持ち出した。

「うん。好い。何でも好いや。どうせ遊戯だ。面倒臭いや。早く送つ了はう。」

一體、これが本當に俺の書いたものか知らんと思つて、鍾吉は寧ろ不思議さうにそれを眺めた。

「ええ。それが好いわ。」

細君は甲斐甲斐しく包んで、もう直ぐ送れるやうに拵へて呉れた。

「うん。それで好い。いま俺が出して來よう。風呂へ行くから。」

「ええ。では、さうなさい。」

細君は石鹸と手拭とを取つて渡しながら、

「でも、早いものね。あなたがこれを書き出したころとなら、もうめつきりと寒くなつたわ。」

だが、その途途、鍾吉は何となく妻の樣子が氣になつた。實際、里子はその朝ついぞこれまで見たことのないやうな樣子をしてゐた。蒼い顔の底に一種不思議な緊張を湛へて、ふと思ひ出したやうに笑ふ義理のやうな笑ひも、鍾吉はかへつて何となく底氣味が惡かつた。

十一。

「おい。里子。大變だ。例の朝日のやつ、二千三百から集つたさうだ。」

一日、鍾吉が社から元氣よく歸つて來た。

「あら。さう。そんなにどつさり。隨分大變なのね。」
さすがに里子も目を圓くした。
「うん。大變だ。なかには文壇知名の士もあると出てた。」
「さう。だと、なほのこと當選すると好いのね。」
「うん。だが、まあ大抵は駄目さ。さう思つてりや間違ひない。」
「でも、それは分からないわ。」
だが、鍾吉は原稿を送り出してから日が立つに連れて、次第に何となく當選しさうな氣持になつて來た。次第にあの作品のなかには自分も氣がつかないやうな或る甘(うま)みが籠つてゐさうな氣がし初めた。が、要するに當選するしないは問題でない、そんな事は眼中に置かないで、早速次の作品に掛つて見よう、とその時は實際張り切つた心持で眞面目にさう考へてゐたのであるが、ところが、時が立つに連れて、さう言ふ氣持は次第に寛(ゆる)んで了つた。迹の作品に筆を着けるのはさて措いて、第一、次の作品の構想なんぞてんから頭へ浮かんで來なかつた。好く考へて見ると、ああして徹夜して物を書き上げたなんぞ、何だかいつもの自分に

も似合はない、迹にも先にも一世一代の出來事で、全く不思議なひよいとした何かのはづみのやうな氣持がした。
「あなた。もしか今度のが旨く行つたら、ずつと續いてお書きになるつもり。」
一日、里子が微笑しながら鍾吉に聞いた。だが、その樣子には底にどこだか或る沈痛なものが潜んでゐるやうな氣持がして、思はず鍾吉はまごついた。
「なに。そんなことは無いさ。だが、書ける時には、復たときどき書いても好いぢやないか。」
「ええ。それは無論さうですわ。」
しかし、里子のその變に底まで突き透すやうな沈鬱な目付が、ひどく鍾吉の氣持を重くした。
「朝日の懸賞からは隨分いろんな人が出たんですね。田村俊子さんに大橋房子さん、みんなさうなんですね。」
「うん。それから野村愛生、沖野岩三郎、一等最初が『琵琶歌』の大倉桃郎さ。」

そのうち急にどつと寒くなつて、鍾吉は例のとほり朝はますます起きにくく、せめて日曜に午ちかくまで寝て、それから朝湯に行くのを何よりの樂しみにした。同時に、里子のお腹は次第に人目につき出した。

丁度その時、里子の母親が風邪から肺炎を牽き出して、里子は三日ほど泊りがけで介抱に行つた。

その間、鍾吉は三度とも近所の爲出屋から辨當を取つて、久しぶりに、たつた一人で暮らした。すると、そもそもその最初の日に社から歸つた時から、鍾吉は何とも言ひやうのない淋しい氣持に打たれて了つた。いつものやうに、

「お歸んなさい。」

と妻に迎へられる代りに、一人でごとごとと建附の惡い格子戸を明けて這入つたが、家のなかは丸で空家のやうにがらんと、まるきり坐るところも無い氣がして、鍾吉は暫く惘れてただぼかんと立ち盡してゐた。

やがてとつぷり日が暮れると、鍾吉は、なほのこと、何ともかとも名狀することの出來ない淋しい氣持に襲はれて、しまひには丸で身も世も有られぬやうな氣になつて了つた。そして、ただもう矢鱈と妻の里子が戀しかつた。床に這入つてからも、ただわけが分からずに肌淋しくて、どうにも丸きり寝つくことが出來ない。

鍾吉はすつかり驚いて了つた。一體、こんな調子で、萬一里子に死なれでもしたら、どうなるのだらうと考へた。お產で死ぬ女だつて隨分あるんだ。とにかく、もうどんな事があつたつて、生きてゐる限り俺は里子と離れることは出來ないのだと、つくづく身に沁みて考へて、鍾吉は思はずほつと大きな息を吐いた。そして、世のなかには直ぐ女房を離緣したりする男も隨分あるのが、鍾吉にはそれが丸で嘘のやうに不思議であつた。

「あなた。やつと今かへりました。隨分不便だつたでせう。」

里子がいそいそ歸つて來たとき、鍾吉は思はず心中飛び立つやうな思ひがした。

「なに。さうでも無い。反つて氣持が變つて面白かつた。それで、どうだい、お母さんの

様子は。」

餘まり手放しに嬉しさうな顔をして了つては、夫たる者の威信に關するやうな氣がして、一所懸命こらへて見たが、しかし、やつぱり抑へても抑へ切れぬ、溶けるやうな笑顔にすつかり頽れて了ふ自分の相好が自分でも好く分かつた。

「まあ。あなたつたら、これどうでせう。一度も床を上げなかつたんですか。それに、茶碗を枕もとへ持つてつて、吸殻を突つ込んで。」

「うん。つい灰皿が見つからなかつたんだ。」

「だつて、いくら何でもこれは餘りだわ。だから、ちよつとも一人なんぞ置いてけやしない。」

里子がすつかり驚いて、頻りに次の間を片づけてる間に、鍾吉はその方へは背を向けて、讀みもしない新聞に顔を伏せながら、一人にこにこ悦に入つてゐた。

十二。

さて、次第に押し詰まつて、何となく世のなかが騒騒しく、遽ただしくなつて來た。鍾吉も、また例の負債の利子に途方に暮れて、幾晩も寢にくい夜が續いた。

一日、鍾吉は社の歸りに債權者の一人を訪ねて、そして何とも言へない不快な氣持を抱いてその家を出た。その厭やにお高く人を見下したやうな、そのくせ言葉や應對の態度はいかにも鄭重を極めて、にやにや一種特別な微笑さへ浮かべながら、それで居て變に厳しくねちねちと彼に迫つて證書の書替をやらした、その債權者の一一の滑つこい言葉や底意地の惡い物ごし恰好やが、まるで烙きつけたやうに彼の頭にこびり附いてゐた。彼は蒼い顔をして家の格子戸を明けた。

「どうでした。寄つて入らして。」

「うん。寄つて來た。」

「それで、どうでした。旨く行つて。」

「うん。書替をすることにして、まあ、どうにかやつて來た。」

鍾吉は、なる可く細君に顔を見られないやうにしながら、着物を着替へた。

「さう。」

細君のはうもそれ以上聞かなかつた。が、その日は細君も、何だか特別に蒼い顔をしてゐた。

「おい。臺所で調理棚を使ふと使はないとは、主婦が一日一里づつ歩くと歩かないと違ふさうだ。」

長火鉢の傍へどかりと趺をかきながら、鍾吉が態と元氣をつけるやうにさう言つた。

「さう。そんなに違ふものですかね。」

だが、里子は何となく聲にも力がなかつた。

「うん。けふ社でさう話してた。」

「さう。それで、あなた、うちでも買はうとお思ひなすつたの。」

里子が淋しく微笑した。

「うん。ひとつ買ひたいもんだと思つた。なに。斯ういふことは、ついそのとき買つ了へ

ば好いんだよ。その時ならどうにだつてなるんだ。俺は近頃つくづくさう言ふ氣がするがね。世の中なんてさう言ふもんなんだ。どうしてだつて濟んで行くもんなんだ。びくびくしてたら切がない。」

鍾吉は自分で自分に力をつけるやうにさう言つたが、しかしその言葉の調子にも、何だか妻に阿ねるやうな卑しい嘘のところのあるのが、自分ながら氣持が好くなかつた。だが、里子は何とも言はず、やはり同じやうに淋しく笑つてゐた。

「おい。お前、どうした。どこか悪いか。」

ふと里子の蒼い顔に氣がついて、鍾吉が驚いた。

「いえ。どうして。」

「でも、お前、何だか顔色が悪いぜ。」

「さう。何ともないんですよ。どうせ少しは。どうせ斯んな體だから。」

里子は力なささうに後毛を搔き上げた。

「さうかい。それなら好いが。」

鍾吉は何だか怖いものでも見るやうにそつと樣子を窺つた。

鍾吉は、近頃になつて、特に里子の樣子の變つたのに氣が着いた。そして、どうもそれはただ姙娠のせゐとばかりは思へなかつた。

里子はもとから極く靜かな落ち着いた女であつた。そして、その底にどこだかしつかりした所を持つてゐた。ところが、それが近頃、急にまた特別に靜かに、特別に落ち着いた樣子を示して來た。同時に、底のしつかりした點が更によく見えて來た。鍾吉は、考へると、何だか變に凄いやうな氣のすることもあつた。

「おい。お前、俺みたいな無能な男の所へ來たのを後悔する氣は起こらないかい。やつぱりあの時みんなの言ふ通りにしとけば宜かつたと言ふ氣はしないかい。」

一日、また鍾吉が眞面目ともつかず笑談ともつかぬ調子でさう聞いた。

「なぜ。なぜそんな事お聞きになるの。」

「なぜつたつて。だつて、いい加減さう言ふ氣になりさうなものぢやないか。」

「だつて、今更なつたつて、もうどうにも爲樣が無いぢやないの。」

やがて復た里子が淋しく笑つた。

「どうにもならなくは無いさ。まだ、お前、どうにでもなるぢや無いか。」

思はず鍾吉が氣色ばんだが、しかしやつぱり里子が相手にしなかつた。

「あなた。ちよつと觸つて御覽なさい。ほら。動くでせう。」

その晩、寢てから里子が鍾吉の手を取つて自分の腹にあてた。

「ほら。分かるでせう。ねえ。ほら。動いてるでせう。」

「さうかい。俺には宜く分からない。」

鍾吉は氣味惡がつて、すぐ手を引つ込めようとしたが、しかし里子が放さなかつた。

「これ一たい誰の子でせう。」

里子は鍾吉の手を抑へたまま闇のなかでさう言つた。が、しかし、その聲には艶も媚も何にも無かつた。

十三。

鍾吉はやつぱり例の懸賞を何より氣にしてゐた。あれから日が立つに連れて、やはり當選しさうな確信は少しも減ぜず、いつかその賞金を自家の未來の經濟に入れて計算するやうになつたが、しかし當人は少しもそれを不思議とは思はなかつた。

「あなた。あれまだ發表にならないのね。」

「うん。まだだ。新年さうさう發表するとこのあひだ出てた。」

よく二人でその噂をし合つた。

「なに。どうせ駄目に極まつてる。」

「そんな事はないわ。」

しかし、兩方が嘘を吐き合つてゐるのだと言ふことは、兩方ともが知つてゐた。

あれから鍾吉はまたすつかり元どほり懶けてゐる。すぐ迹を書く氣なんぞはもう丸で夢の

やうに消えて了つて、萬一あれが旨く通つてからが、果して今では迹のを書く氣になれるかどうか怪しかつた。やはり例のとほり毎日社で無能振りを發揮しては、それから家へ歸れば歸つたで、唯だぐずぐず時間を持て餘した。

「おい。里子。そつちが片づいたら、ちよつと來い。トランプをやらう。」

「またトランプ。」

さう言つては、今はトランプにも一向氣の無いらしい里子を引き出した。

暮れから降り續いた雪がからりと晴れて、元日は好い天氣である。鍾吉が起きた頃には、もう街は盛んに年始の俥が飛んで、雪のうへも眞つ黑に汚されてゐた。

「明けましておめでたうございます。」

膳を鍾吉のまへへ出しながら、里子が、これも笑談とも眞面目ともつかぬ樣子で、ちやんと手を突いた。髪を綺麗に上げて、何かぴかぴかした物に着替へてゐる妻の姿を鍾吉は珍らしさうに眺めた。

「うん。先づ首も括らずに濟んでおめでたう。」
「あら。そんな緣喜の惡いことを言ふもんぢや無いわ、あなた。元日さうさうから。」
「なに。構ふもんか。本當のことだ。餘つほど縊らうかと思つたんだ。こんなめでたい事はない。」
「でも、本當によく越せたものね。本當にどうにでもなるものなのね。」
夫婦は隔てのない顏を見合はして思はずほつとし合つたが、しかし、やつと春まで延した幾つかの借金の利子のことを思ふと、やつぱりほつとも出來なかつた。
ちやんと着物を着て見ると、細君の腹は更に目立つて人目についた。

とうとう懸賞の結果が發表になつた。
その日、鍾吉は、社で何心なく新聞を明けたが、ちらりとその初號活字の見出が目に入ると、思はず目を皿のやうにした。何かにどしんと衝突かつたやうに、動悸がとんとん搏ち出した。

が、活字の上をまるで走るやうにずつと一目で見透した時、彼の名は見つからなかつた。次の佳作といふ所にも彼の名は無かつた。鍾吉は突然どしんと深いところへ落ち込んだやうな氣持がした。一體なんと里子に落選を知らせたものかと言ふことや、それから、いつからかすつかりその賞金を當てに融通するつもりでゐた借金の利子の工面やら、そんな事が一度に頭のなかで渦を卷いた。そして、まるで何かに扱かれたやうに、一度かつと頭に上つた血が、また急にすうと下つて、鍾吉は唇の色まで失つて了つた。
やつと勇氣を出して、また當選の作品の名や選者の評なんぞを讀み出した。だが、やつぱり變に氣持が上ずつて、どうも好く意味が分からなかつた。とうとう鍾吉はそつと額の膩汗を拭いた。
「おい。どうした。どこか惡いのか。ばかに顏色が惡いぜ。」
通りすがりの同僚が愕いて聞いた。
その日、鍾吉は何よりも歸つて里子の顏を見なくてはならないのが辛かつた。出來ることなら、もうこれきり里子にも誰にも逢はずに、誰も居ないどこか山の奥へでも隱れて了ひた

いほどな氣持がした。

「おい。とうとう例のが發表になつた。」

鍾吉はさつそく玄關でさう言つた。それでも初めて新聞を見た時とならもう餘ほど落ち着いてゐたが、だが、やつぱり何とも名狀しがたい壓するやうな重い氣持はどうにも取り除けやうがなかつた。

「あら。とうとう發表になつて。それで、どう。」

思はず里子も目を輝かした。鍾吉は異常な努力で無理やり何かを抑へつけて、やつと微笑しながら、默つて首を横に振つて見せた。だが、自分ながら何だか顏がひん曲がつたやうな氣持がした。

「さう。いけなかつたの。」

里子は思はず眞面目な顏をして、

「殘念だつたわね。」

「なに。どうせさうだと思つてたから。」

里子のその顏を見ると、思はず何かが込み上げて來さうな氣持になるのをやつと抑へて、鍾吉は故ちに快活に言つて、ずんずん居間へ通つた。

「それで、一體どんな人が通つてゐました。」

「うん。知らない人ばかりだ。女の人なんぞも通つてた。」

「女の方が。さう。よく女の方が通るのね。でも、あなた、がつかりなすつたでせう。折角ああやつて一所懸命お書きになつたのに。」

「なに。そんな事はない。どうせ閑にあかせた徒事だから。」

だが、鍾吉は里子にさう慰められて、反つて何とも言へない恥しい氣持がした。何だかまた更めてはつきり無能の烙印を額の眞ん中へ押されたやうな氣持になつた。そして、まるで自分がいつもの自分ではないやうに、變に思ひ上がつた、總ての自制を失て了つたやうな氣になつて、赤い顏をしながら唯だやたらと何だか喋べり續けた。

十四。

「あなた。堪忍して下さい。あれは私が悪かつたんです。」

その晩、床へ這入つてから、突然、里子が言ひ出した。

「私があんなこと言つたもんだから、あなたお出しになる氣になつたんでせう。ねえ。堪忍して下さいよ。」

何だか里子の聲は泣いてゐるやうである。

「そんなことが有るもんか。俺が勝手に思ひついたんぢや無いか。」

「いいえ。さうぢや有りません。私がさう言ふ氣にさせたんです。そして、あなたに新んな厭やな思ひをさせて了つて。」

鍾吉は里子のそのいかにも斷乎たる調子にすつかり驚かされて了つた。そして、ただ闇のなかで凝つと里子の顔を見ようとした。

「でもね。私さう思ふのよ。あれはやつぱり通らなかつた方が宜かつたと思ふのよ。」

やがて復た里子が言ひ出した。それはいつもの通り靜かな落ち着いた聲であつたが、しかし鍾吉にはその底に一種特別な強い力が籠もつてゐるやうに思はれた。

「ねえ。私やつぱりあなたはそんな事をなさる方ぢやないと思ふのよ。あんな出來心は起こさないはうが好いと思ふのよ。それは反つて苦勞の種を撒くばかりだと思ふのよ。」

里子の言葉はまるで抉るやうにぐいぐい鍾吉の胸に喰ひ込んで行つた。だが、鍾吉はやはり凝つと動かなかつた。

「ねえ。私たち何もかも今のままで好いぢやありませんか。あなたがさうやつて毎日社へ勤めて入らしつて、それでもうどうにもならないことは、本當にどうにもならないことなのよ。ねえ。いつまでもこの儘でやつて行きませう。今度のことは本當に私が悪かつたんですから、どうか堪忍して下さい。その代り、これから幾ら貧乏したつて、幾ら世間體が悪くたつて、私も辛抱しますから、あなたも辛抱して下さい。ただ脇目を振らずにやつて行きませう。ただ二人とも體を悪くしないやうにして、ねえ、それだけ氣をつけませう。」

二人ともそれから長いこと凝つと闇のなかに動かなかつた。鍾吉には、一體里子は泣いてゐるのかどうか、どうも好く分からなかつた。

靜かな夜である。どこか遠くで、ごおつと電車の音がした。終電車であらう。

「おい。お前、正直に言つて御覽。俺のやうな男のところへ來て、お前、後悔してゐんだらう。え。さうなんだらう。」

すると、里子は突然激しく鍾吉に縋り附いた。

「あなた。それは餘まりだわ。そんなこと言はれて、私どこに立つ瀬があるんです。私なにを力に辛抱するのよ。ただの一度だつて、私、後悔なんぞしたことはないのよ。」

里子は鍾吉の胸に顏を埋めて、聲を立てて咽び泣いた。

その晩、それから二人とも殆どまんじりともしなかつた。

翌朝、夫婦は、どつちも腫れぼつたい蒼い顏をして起きた。その日はまた怖ろしく寒い日で、明方から吹き出した雪持ちのひどい風が、一しきり間を置いては激しく電線を唸らせてゐる。

鍾吉はやはりいつもの通り社へ出勤した。鬱血した重い頭と、それから目の底のづきづき痛むのを、やつと辛抱しながら、外套の襟を立てて停留場まで歩いたが、しかし家を出ると同時に、その迹でまた激しく泣いてゐる妻の姿がはつきり彼の頭に浮かんでゐた。

「おい。里子。こんな日は外へ出ちやいけない。下地が一面に凍つてる。轉ぶと危ない。」

一日、日曜にまた鍾吉が朝湯から歸つて來た。

「ええ。でも、今日は後にはきつと温かくなるのよ。こんなに凍つて、それに些つとも風がないから。」

里子の腹はますます迫り出して、まるで仰け反るやうにして、やつと歩いてゐる。

「お前、ずゐぶん眉が薄くなつたね。ここから見ると、一たい有るのか無いのか分からないぜ。」

火鉢のそばで頻りに爪を剪つて居た鍾吉が、ふと顏を擧げてさう言つた。里子は何か赤い切を膝の上にのせて、せつせとやがて生れる赤ん坊の着物を縫つてゐる。

「ええ。眉が抜けると、赤ん坊が男の子だつて、好くさう言ふんですがね。」

「おや。さうかね。そんなことが有るのか。」

思はず鍾吉が乗り出した。

「でも、そんなことどうだか分からなくつてよ。」

笑ふと細君の「うけ口」はますます下唇が突き出て、ますます「うけ口」の本領を發揮する。見ると、やつぱりそこには今でも一種特別の愛嬌が有つて、しかも、その愛嬌が、何だか同時に細君の全體を統帥してゐるやうな氣持がする。細君の「うけ口」を發見して以來、近頃は鍾吉も何となく前よりは自分の妻が少し分かつて來たやうな氣持になつてゐる。

「あのね。男の方つて、お上さんが姙娠になつたら、誰でもきつと遊ぶもんなんですつてね。」

「さうかね。」

「ええ。さうですつて。十人が十人さうなんですつて。」

「さうかね。すると、俺なんぞはよくよくの意氣地なしなんだね。よくよく妻ノ口なんだ

ね。」

「だから家庭耽溺だなんて言はれるのよ。あなたも少し遊んで入らつしやい。」

「ふん。」

里子は笑ひながら窺ふやうにそつと夫の顔を見衛つたが、しかし鍾吉は、ただ苦笑しただけで、復た俯向いて熱心に爪を剪り出した。

三市と阪井野巡査。

村の駐在所の阪井野巡査が轉任になると聞いて、誰よりも驚いたのは三市である。三市はつい此のあひだ、その阪井野巡査と一問題起こしたところであつた。

三市は村では中くらゐの百姓の入養子で、實は人も極く善いのであるが、村では不斷からすつかり莫迦にされ切つてゐる。何しろひどい大法螺吹きで、いつも愚にもつかぬ自慢をして歩いては、直ぐにその迹から尻尾を捉へられて、いつでもぎやふんと參つてゐる癖に、やつぱり懲りないで、直ぐその迹から迹から嘘つぱちを觸れ廻つてゐる。

三市の家ではこれまでついぞ一年も蠶の好かつた驗めしがない。いつでも中途からばた勤た病氣に罹つてやられるので、近所となりから、いつも、もつと好く消毒しろ消毒しろとばめるのであるが、しかし幾ら勧めても三市は決してろくに消毒しない。來る年も來る年も、いつでも中途からけそりとやられては弱つてゐる。ところが、それでゐて、三市は決して人に成績が悪かつたやうに言つたことが無い。いつでも村中の誰よりも收穫が有つたやうに吹

聽して歩いては、物笑ひの種を撒いてゐる。

「そいでも、お前所なあそねえに無かつた、繭買ひの信さがさう言つただに。その半分も無かつたて、わしにさう言つただ。」

とうとう隣りの女房が悔しがつて、いちど三市にさう言つたことが有る。

「へえ。そりや信公が間違へただ。」

それでも三市は動じなかつた。平然とさう言つて澄ましてゐた。

「あれはへえ病氣だ。」

さう言つて村の者はもう誰も相手にしなかつた。

ところで、三市は何よりも銃獵が好きである。そしてまた鐵砲だけは相當に上手で、隨つて、この銃獵に關する三市の法螺や自慢と來たら、それはまた殆ど底の知れないものであつた。殊に自分の持つてる獵銃を比類稀なる名銃のやうに吹聽して、或る時はその爲に三市は七十五圓出したと言ふかと思ふと、また或る時は九十圓拂つたとも言つた。だが、實は四十圓で古を買つたので、とうとう友達の一人が、幾ら何でも九十圓は高い、九十圓出せばマア

セルの連發が買へる、もし本當に三市が九十圓出したのならそれはひどい買ひ冠りだと言ふと、すると三市はまた眞つ赤になつて、いや、確かに九十圓出した、また確かに九十圓の値打はある、嘘と思ふならこのつぎ領收書を持つて來て見せる、領收書は今でもちやんと自分の日記のその買つた日のところに挾んであると言つた。ところが、三市は生れてからまだ唯だの一度も日記なんぞ書いたことのない男で、實はその時初めてふと自分の言葉から思ひついて、來年はひとつ日記を買つて見ようかなと思つたのである。

とにかく、さう言ふわけで三市は毎年銃獵の鑑札を受けてゐる。ところが、近ごろ規則が變つて、毎年その鑑札を一度警察へ返さなくてはならないことになつた。ところで、三市はつい面倒臭くて、そのままそれを返さずに居た。ところが、突然警察から督促狀が來て、どうやら罰金を取られさうになつた。三市は非常に愕いて、さつそく村の鍛冶屋の偏目の六之助を頼んで、駐在所へ阪井野巡査を訪ねて鑑札を返して貰つて、どうか一つ罰金を取られずに濟むやう盡力して呉れろと泣き附いた。六之助の運動効を奏して、とにかく罰金も取られず、それはそれで無事に濟んだ。

そこで三市も、いづれ阪井野巡査と六之助には一升買つて禮に行かなくてはなるまいと思つてゐた。が、思つたままで、ついそれも暫くその儘になつてゐた。

元來、三市は口に似合はず非常に吝で、自家の作男の食べ残した魚の骨や尻尾まで残らず捨てないで残して置いて、そつと迹から自分が食ふのだと言ふ評判が有るくらゐで、出すこととなると、どうせ出さずには濟まないものまで、つい出し惜しみをするのである。

そのうち一度途中で阪井野巡査に出逢つたが、阪井野巡査は自轉車だつたので、

「や。これは。先日はどうも……。」

三市があわてて呼びかけるのを背に聞き流して、

「やあ。」

巡査は飛ぶやうに向うへ消えた。

ところが、それから暫くすると、突然、三市は警察本署から呼出しの差紙を附けられて、そして科料一圓に處せられた。三市は非常に驚いて、早速また鍛冶屋の六之助を庸つて阪井

野巡査のところへ行つて貰つた。

「お前、何けえ。阪井野さんにまだあのお禮をしなかつたのけえ。」

歸つて來て六之助が三市に聞いた。

「それがへえ、その事だ。阪井野さんにもそれからお前にも、お禮をしようしようと思つてる中についまだその儘になつてるだ。何せへえ、蠶やなんぞで忙しかつたもんだに。」

「俺なんざあ、へえ、どうでも好いが、阪井野さんに直ぐお禮をしとかねえてこたあ無えわさ。今日も阪井野さん俺にさう言つただ。せつかく俺が骨さ折つてやつただから、直ぐにも禮に來るだかと思つてただに、それにへえ三市は道で逢つてもろくに禮も言はねえ。そこで、爲樣がねえから規則の通りの手續きをしただと斯う言ふだ。」

「だつて、お前、道で逢つたつて、それはへえ、いかにも出逢ふことは一遍出逢つただ。それだて、向うはへえ自轉車で、どうして禮が言へるずらか。それもへえ、俺は言つただ。言つただけども阪井野さんが聞こえなかつただ。」

「何だか知らねえが、何にしても、もう本署のはうへ廻つてるつうだから、どうにも爲樣

が無えつう事だ。やつぱ、お前が自分で警察へ行かなきや濟まねえつう事だ。」

何だか偏目の六之助までが、寧ろ阪井野巡査の肩を持つて、吝な三市を好い氣味だと思つてるやうな口振である。すると、三市は急に眞つ赤になつて憤つた。

「へえ。分かつてゐだに。阪井野さん禮が欲しかつたんだわさ。その意趣返しをしたんだわさ。へえ。覺えてやがれ。糞巡査。今におのれどうして呉れるだか。へえ。好えわ。好えわ。」

そこで三市は心中ぶりぶり憤りながら本署へ出頭した。

さて警察へ行つて見ると、何だか知らんが、すつかり怯えて了つて、控所の隅つこで一人小さくなつてゐた。

いよいよ呼び出されて警部の取り調べを受けて見ると、思つたほどに喧ましいことも言はず、思ひのほかに優しい口調で一一聞かれるので、三市は大いに安心した。と、丁度そこへ入口をごとりと明けて阪井野巡査が這入つて來た。すると、三市は突然またひどく腹が立つた。

「へえ。それはへえ、一度濟んでをりましただ。この阪井野さんに賴んで一度濟んでをりましただ。」

なぜだか、三市は、實際うまく口も利けないほど、ひどく腹が立つて了つた。

「へえ。六之助に賴んで、へえ、鍛冶屋の六之助でごわす。へえ。偏目の六之助に賴んで阪井野さん所へ行つて貰つて、そんなら今度はそれで好えからつ事でごわしただ。それでへえ、わしはもう濟んだ事だと思つて居りましただ。そしたら、へえ、……。」

「莫迦なことを言つちやいけない。濟んだつて事が有るわけが無いぢやないか。とにかくお前は鑑札を返さなかつたのだらう。それに再三注意をしても、說諭をしても聽かないから、それで已むを得ず阪井野君が手續をしたと言ふのぢやないか。」

「嘘でごわすだ。嘘でごわすだ。わしはへえ一遍も注意なんぞ受けた事はごわせん。再三てへえ、わしは唯だの一度も注意も說諭も受けはしねえでごわす。ただ一ぺん書附で鑑札を返さねえと罰金だぞと言つて來なすつただから、そんでへえ、わしは六之助を傭つて、へえ、偏目の鍛冶屋の六之助を傭つて、へえ。」

三市は眞つ赤になつて捲くし立てた。

「おい。お前、嘘を言つてはいかんぞ。それでは大分阪井野君の話と違ふぢやないか。」

「いや。それは私も言つたんです。確かに注意はしたんです。」

阪井野巡査もひどく狼狽して、あたふた横から口を出した。その様子が、いつもの、何かにつけて特別に喧ましい傲慢な阪井野巡査とまるで違つて、唯だやたらとへいへい警部に胡麻をすつて居る。その様子を見ると、三市はまた急に勇氣が湧いた。

「いんえ。そんな事はごわせんだ。そんな事は。わしは唯だの一遍も阪井野さんからは何も聞きはしねえでごわす。へえ。本當の事でごわす。それは鍛冶屋の六之助に聞いたら直ぐに分かりますだ。それはへえ、鑑札返さねえのはいかにもわしが悪うごわしただ。そだからへえ、わし罰金出しますだ。だけんどへえ、だけんど……。」

「ふん。それではお前は罰金さへ出せばそれで好いと思つてゐるのか。え。お上へこんな手數を掛けても、罰金さへ出せばそれで濟むと思つてゐるのか。」

「へえ。」

勝ち誇つたやうな氣になつてゐた三市は、警部の一言にまたどかりと參つて、すつかり蒼くなつて了つた。

警察から歸ると、三市はさつそく大きな聲でそこら中を吹聽して歩いた。

「お前、へえ、阪井野さん嘘ばかり言つてただ。それでへえ、俺、警部にさう言つて聞いてやつただ。巡査てそんな嘘こいても好いもんかとな。そしたらお前、阪井野さん警部のまへで眞つ赤になつて震へ出したぜ。迹でへえ、どんだけ叱られただか。」

三市が、まるで鬼の首でも取つたやうに大得意で話すのを聞くと、みんな一度に笑ひ出した。そして、不思議なことには、今度だけはこの大法螺吹きの三市の言ふことを誰も嘘だと思ふものが無かつた。それは、相手が、常からひどく横柄で、そして何でも無いことにまでばか喧ましくて、平常村中から嫌ひ拔かれてゐた阪井野巡査であつた所爲もあつたが、同時に、それ以來、その阪井野巡査の樣子が急に變つて了つて、何かにつけてひどく後めたさうな樣子になつたのが、その何よりの裏書になつたわけである。

以來、阪井野巡査はすつかり威信を失墜して了つて、村全體から一種變に侮蔑の目を以て見られるやうになつた。同時に、三市は、なほさら得得と、何度も、またどこへ行つても、その同じ話を繰り返した。

「だけんど、お前、それは氣の毒なことをしたもんだわさ。ぢたい巡査なんて、はい、これくれえ弱え商賣は無えだに。」

丁度この事件の起きた時には伊勢參宮へ行つて留守だつた三市の女房が、旅から歸つて初めてその話を聞いて、一日しんみり三市に言つた。これは養子娘に似合はず、人柄が好くて悧巧で、不斷から三市には過ぎものだと皆に言はれてゐる。

「それだてへえ、何も、もともと阪井野さんが惡いからぢや無えかさ。」

「それはさうだけんどもさ。もと言うたら、お前さが鑑札を返さねのが好くねえだに。第一、あの時すぐお禮に行かねえのが好くねえわさ。何せお前さ、巡査なんてもなあ、月給は少えし、それに阪井野さんだて、子供の四人も有つてさ。そねん時で無くて、どうして旨え酒の一つも飲めるもんかね。」

その時は何とも言はなかつたが、しかし、それから三市は女房のまへではふつつりその話をしなくなつた。しかし、いちど人なかへ出ると、やはり直ぐその話を持ち出しては、ひとり得意の鼻を蠢めかしてゐた。

それから間もなく、三市はいちど途中でひよこりと阪井野巡査に出逢つた。阪井野巡査はちやうど巡廻の途中で、帶劍をがちやがちや鳴らして向うからやつて來たが、ふと三市の顏を見ると、突然、怖ろしい顏をして睨めつけた。三市も、思はずどきりとして立ち留まつたが、ふとこの間の女房の言葉を思ひ出すと、すぐ機嫌の好い笑顏をして傍へ寄つて行つて、

「阪井野さん。こないだはへえ、どうも飛んだ御厄介になりまして、へえ。」

と丁寧にお時儀をした。すると、阪井野巡査は何にも言はず、唯だぷいと横を向いて、すぐ向うへ行つて了つた。

「へへ。阪井野さんまだ憤つてゐだ。憤つたてへえ、爲樣が無え。何も俺の知つた事ぢや無え。ぬしが惡いだ。」

三市はその迹を見送つて獨語した。

ところが、突然、今度その阪井野巡査が轉任になつた。それは、ここよりもつとひどい山奥の、もつとひどい寒村の駐在所へやられたので、きつとこの間のあの三市の事件なんぞも今度のこの左遷の原因になつたに相違ないと、村でみんな評判し合つた。

だが、初めてさう聞いた時に、三市は思はずほつとしたやうな氣持がした。あれ以來、三市は、どうも阪井野巡査と顔を合せるのが氣になつて爲方が無かつた。だから、何だかこれでやつと助かつたと言ふ氣持がした。だが、その迹で三市は、急にひどく阪井野巡査が氣の毒になつた。何だか莫迦に阪井野巡査が可哀さうになつた。

「おい。とうとう阪井野さん代つ了つた。何でもへえ、これお前の所爲だて、みんな喜んでるぜ。」

「うん。」

そんな事を言つて、三市の肩を叩く者が有つても、何となく三市はいつもほど元氣が無か

つた。

「それだて、阪井野さんも好つく貧乏だと見えるだに。轉任するたつて、子供の呑んだ藥の代も拂つて行けねえつ事だ。小谷さんに賴んで、やつと暮まで證書にして待つて貰つたつ事だ。」

さう聞いて、なほ一層三市は阪井野巡査が可哀さうになつた。そして、何だかそれが自分の所爲でもあるかのやうに、ひどく氣が咎めた。

「それだてへえ、何も俺のからぢや無え。結句、ぬしが惡いだ。」

まるで申しわけのやうに、唯ださう呟いた。

「お前さ。阪井野さんが代るつうだねえか。」

一晩、女房が三市に言ひ出した。

「うん。代るつう事だ。だてへえ、何も俺のからぢや無え。」

「だけんどもさ。お前。本當に氣の毒ぢや無えかね。それに、今度は又めつた山奥へやら

れたつう事ぢや無えか。これから寒くはなるしさ。本當に可哀えさうだ。お前さ、何か餞別をしたら好からずに。」

「餞別か。へえ。そんなものは要るめえ。村の餞別に俺へえのも這入つてるだに。」

「それはお前、また別だわさ。あの時のお禮がまだその儘になつてるだから、お前さ、あした立ちしなに何か持つて行つて上げたら好からず。」

「あした。へえ。あした立つてえか。」

「さうだとさ。お前さ、さうしなせえ。阪井野さん酒好きだから、酒の一升に子供の菓子でも添へてさ。それに一圓も包んだら好からずに。」

「ふん。そだが、行くなら、われ行きねえ。俺へえ、何だか具合が好くねえだ。」

「何のはい、具合の好くねえ事が有るもんかね。そんでこそお前、志も届くつもんだ。何のはい、誰かにそつと時間を聞いといて、立つすぐ前に行きやわけえ無え。」

三市は暫く默つて考へてゐたが、

「さうだかね。では、さうするだか。だがへえ、やつぱり具合が好くねえだね。」

やつぱりまだ決し兼ねてゐた。

翌日、三市が女房に急き立てられて、不精無精、片手に大きな酒の瓶と、片手には菓子折と餞別の包んだのをぶら下げて駐在所まで來て見ると、阪井野巡査の一家はもう立つて了つた迹で、戸にはぴんと錠が下りてゐた。三市は何となくほつと助かつたやうな氣もしたが、同時に何となく氣の濟まないやうな氣持もした。

「阪井野さんかね。もうさつき立つただに。」

三市は裏へ廻つて隣の上さんに聞いて見た。

「さうだかね。もう餘つほど前に立つただかね。」

「うんにや。まだつい今し方だに。お前さ、何か用事だかね。」

「うん。なに。ちよつと餞別を上げてえと思つただが。」

「そだら、今から追つ掛けたらまだ結構間に合ふだに。今ごろまだ立場でぶらかさやつてる最中だに。」

ここは縣道が通つて居ないので、ここから半里足らずの次の村から馬車が出る。阪井野巡査の一行は、大きながらくた荷物を積んだ荷車と一緒にそこまで歩いて、そこから馬車で任地へ向ふのである。

「さうだかね。そだら、やつぱ行つて見るずらか。」

三市は暫く立つて考へて居たが、やつと決心した。

「だて、行くだら急いだ方が好えだ。せつかく追つて行つて、間に逢はねぇと殘念だに。」

「うん。」

三市は急いで歩き出した。

もう秋も可なりに深く、それにこのあたり高原の朝夕は、もう寧ろ寒いくらゐであるが、それでも、斯うした晴れた日の下を急いで歩くと、やはり體が汗ばんで來る。

三市が宿のはづれの廻り角まで行つた時に、向うでほほうと馬車の笛が鳴つた。三市はあわてて駈け出した。

せいせい息を切らして、眞つ赤な顔をして三市が駈けつけて見ると、丁度いま馬車の着い

たところである。阪井野巡査は頻りに馬車の前後へ荷物を積み込む差圖をしてゐた。

「へぇ。阪井野さん。ちよつとお見送りに出ましただ。へぇ。これは奥さん。今度は御轉任ださうでごわして。」

三市が、まだやはり、せいせい息を切らしながら、汗を拭き拭き傍へ行くと、阪井野巡査は思はず惚くりして、唯だまじまじ三市の顔を見た。細君はやつと四人の子供をごたごた馬車いつぱに積み込んだところである。

「これはへぇ、誠に詰まらねぇもんでごわすが、へぇ、ほんの餞別のお印に。」

三市がへどもど兩手で差し出すと、丁度その時やつと我に歸つた阪井野巡査は、

「いや。僕はそんなものは要らん。」

思はず大きな聲を出した。

「へぇ。そいでも、わしの志だに、どうぞへぇお收めなすつて。」

「いや。要らん。君にそんな物貰ふわけは無い。持つて歸れ。」

思はず激しく突き戻した。突き戻す拍子に、片つ方の包みがどさりと下へ落ちた。

「檀那。出ますよ。」

三市があわてて拾つてゐる間に、御者が注意した。馬がもう頻りに足踏をするのを、やつと手綱で抑へてゐる。

「よし。待つて呉れ。」

阪井野巡査は、がちやがちや帶劍をそこらへ突き當てながら、やつと狹つ苦しい入口のところへ這入り込んだ。

「へえ。そいでもへえ、阪井野さん。折角ここまで持つて來たもんだに……。」

「要らんと言つたら要らん。莫迦つ。」

とうとう阪井野巡査が眞つ赤になつて憤つた。

ぽぽうと笛が鳴つて、馬車が勢よく飛び出した。

「そだかてへえ、わし折角ここまで來たもんだに……。」

三市も馬車と一緒に走り出した。

「そだら、ここへ入れときますだで、へえ。」

三市は手早く包みと酒瓶を巡査の足のところへ突つ込んだ。

「危ねえ。」

御者が激しく叫んだ。

「要らんと言ふのに、貴樣、分からんか。莫迦つ。」

巡査も激しく怒鳴りつけた。

三市は危ふく横へ飛び退いて、衝と傍の松の幹の陰へ走り込んだ。

馬車は矢のやうに飛ぶ。三市は松の幹から首だけ出して、そつと見送つたが、しかし、馬車の蹄の迹には、ぱつと眞つ白な砂埃が立つきりで、一向包みも酒瓶も投げ出されはしなかつた。

やがて、馬車は笛の音と一緒に勢よく向うの廻り角に消えて、迹には唯だ一筋白い砂埃が舞つてゐる。

「へへ。捨てねえだ。捨てねえだ。阪井野さん、やつぱ惜しうて能う捨てねえだ。」

三市は道の眞ん中へ飛び出して見送つた。

秋風がしきりに着物の裾を吹く。

「へへ。吳れてやつた。吳れてやつた。」

三市（さんいち）は雀躍して家のはうへ走り出した。

雲。

谷津博士は何心なく今まで讀み續けてゐた厚い獨逸書から顔を擧げた。

ちやうど午後の二時ころかと思はれるが、閉め切つた研究室のなかはしんとして、ことりとの音もしない。ここは、この經濟學科の研究室でも一番の端になつてゐるので、廊下を歩く教授達の足音もここまでは屆かない。ただ、部屋の一隅に白く光つてゐる蒸汽(スチイム)煖爐が微かにさらさら鳴つてゐるだけである。窓のそとには瀟洒な針葉樹の立樹が並んで、その上に柔かい早春の日が映してゐる。

ふと氣がついて見ると、博士はいつの間にか右の指尖のあひだに火のついた朝日を挾んでゐる。博士は思はずひとり苦笑した。一體、いつ袋から拔き出したのか、また、いつ燐寸をすつて火をつけたのか、自分でまるきり覺えてゐない。一心に讀んでゐるうちに、いつかつい手を出したものと見える。

實は、博士は、つい昨日まで、この煙草を廢さうと思つて、ひとり大變苦勞した。元來、博士は、その唯だやたらと痩せ細つて背の高い體(からだ)つきを一見しても分かるとほり、生來呼吸器が甚だ弱い。近時ちよつと少康の形ではあるが、何にしてもこの際、常から自分でもいつ

も善くない習癖だと思つてゐる喫煙を斷然よしてしまはうと決心した。ところが、さてやつて見ると、それがどうしても出來なかつた。

いよいよ廢すことにしたその最初の日には、博士はついぞ近頃覺えたことの無いほどな或る張り切つた氣持を抱いて床を離れた。丁度その日は、朝八時から十時まで講義があり、十時からまた十二時まで講讀のある日で、いつもならば、この十時の二十分ばかりの休みの時間を、教官室で一服しながら過すのであるが、ところが、その日はもう煙草を手にすることが出來ない。そこで、已むを得ず、教官室のなかをあつちこつち、こつこつ靴の音を立てながら歩き廻つて、次の講讀の時間の來るのを待つてゐた。

だが、そのとき博士はもう實に何ともかとも名狀し難きある物足りない氣持に襲はれた。それは、實際これまでに未だ曾て經驗した事のない、ある極度の寂寥であつた。何かじりじり體の底から迫つて來るやうな氣持をやつと抑へて、實際博士はその二十分間をまた無く長いものに持てあぐんだ。

授業開始の振鈴が鳴つた時に、博士は思はずほつとした。急いで革鞄を脇に抱へて教室へ

出たが、しかし、何だか授業も手につきさうも無い、變に苛だたしい氣持に迫られてゐた。

正午に授業を了へてまた教官室へ歸つたとき、とうとう博士はもうどうにも辛抱がしきれなくなつて了つた。そこで、爲方が無いから、もうたつた一本だけ吸はうと決心した。一本だけ吸つて、そしてそれを最後の一本として、これきり永久に煙草をやめる。さう思つて、給仕を呼んで朝日を買ひにやつた。

その給仕の歸つて來るのを待つてゐるあひだ、博士は心から底から飢ゑたる者のせつなさと言ふやうなものを身に味はつた。博士は丁度いま唯物史觀の講義をやつてゐるので、その日も、つい今しがた教場で、

"Alles was wirklich ist, ist vernuenftig, und alles was vernuenftig ist, ist wirklich."

といふ有名なヘエゲルの句と、それに對するエンゲルスの批評、及びこのヘエゲルが歴史發達の課程の背後に潜むといふ「絶對理性」の思想とマルキシズムとの特殊なる關係、丁度いまそれ等に對するその無類の明晰な解説を加へて來た所である。博士は、マルクスもまた煙草を嗜むことが深く、あの鐵のやうな意志を持つてしてなほ且つ一生どうしても煙草を廢

すことが出來なかつたといふ事實を想ひ出して、ひとり密かにマルクスの心事を諒とした。

ごとりと扉が明いて給仕が歸つて來たとき、博士は思はずぐびりと卑しく唾を飲んだ。そして、さつそく袋の口を切つて吸ひ出したその一本が、實に何ともかとも言へず尊くて、一體、どうして自分はこれほど自分の體の欲しがつてゐるものを廢す氣になつたのだらう、また、廢さなくてはならないのだらうと、我ながら寧ろ不思議で堪らない氣持がした。

だが、悠くりかかつて完全に味はつて、その一本を吸ひ切ると、博士は、直ぐに立つて、自分でそのそつくり殘つてゐる朝日の袋を便所へ棄てに行つた。そして、もうこれきり決して喫まないと固く決心した。

が、さて、食事を濟まして研究室へ立て籠もつて見ると、また何とも言へない口の淋しさがひしひし身に迫つて來て、どうにもその手持無沙汰の持つて行き場所が無い。だが、また考へ直して、いつかは後でこの苦勞を思ひ出して、自分ながら滿足に思ふ時も來るのだと思つて、それを力に辛うじて辛抱した。だが、どうもやはりその事ばかりが氣になつて、どうしても專心讀書に耽る氣持になれなかつた。

いつも大抵、博士が研究室を出て家へ歸るのは夜である。どうかすると、家へ着くのはもう十二時ちかくになつてゐるやうなこともある。だが、その日のやうに長い一日を博士は未だ曾て知らなかつた。始終なにか非常に大切なことを忘れてゐるやうな、變にそはそはした落ち着かない氣持になつてゐた。

が、とにかくその日は、無理やり辛抱して、それきり喫まずに家に歸つて寢た。

翌日は非常に早く目が覺めた。と、ぽかりと目が明いたその瞬間、博士はもう無意識のうちに枕もとの煙草と燐寸を手探りに搜してゐた。ああ、さう、煙草をやめたのだつけと、やつと手を引つ込めたが同時に、何とも言へない悔しい殘念な氣が寧ろ衝動的に襲つて來た。

さて、いよいよ起きて顏を洗つて見ると、また、その變に物足りない淋しい氣持といふものは全く無い。まるで何かに腸(はらわた)をひき絞られるやうな氣持である。それに、變に頭に血が昇つて、ひよつとしたら熱でも有るのでは無いかしらんといふ氣までした。

博士もこれは可けないと思つた。若しかしたら、長年常習にした煙草を突然よして、反つて健康を害つたのでは無いかしらんとも考へた。で、とにかく、もう一本だけ喫んで見よう

と思つた。そこで、女中を買ひにやつて、また一本吸つて見た。しかし、その一本を吸ひ切つて了ふまでの旨さといふものは、昨日の一本にもまた遙かに增して、何だかまるで腹の底まで沁み透るやうな氣持がした。完全にその一本吸ひ切つて了ふと、博士は、また立つて、自分でその殘りの袋を便所へ棄てに行つた。

かうして二日のあひだ、博士はこれまで未だ曾て經驗したことの無い苦行を積んだ擧句、これはたうてい駄目だと諦めた。第一、その二日のあひだ煙草のことばかり氣になつて、ほかの事はまるきり何にも出來なかつた。學校で授ける授業すら、何だかいつものやうに氣が乘らなかつた。そこで、とうとうこの苦しかつた戒業を徹廢して、また元のとほり煙草を吸ひ初めた。實は、博士も、そこで初めて思はずほつとした。

だが、この禁煙を斷念してほつとすると同時に、博士はどこか心の奥のはうで或る非常に淋しい氣持を感じた。そして、それは實は一種氣持の好くないところの淋しさであつた。なぜかと言ふのに、どうも、それは、ちかごろ博士が密かに心の奥のはうで感じてゐるところの、自分の生活そのものから來る淋しさとある關聯を持つてゐるやうに思はれたのである。

そこで博士は餘計に厭やな氣持がした。

この一兩年、博士はいつとも無く、ある淋しさが自分の心に根を張つて來たのを感じて居る。そして、その原因を、博士は、自分でも好く知つて居るやうな、また知つてゐないやうな、實に變な氣持がするのである。

數年前、博士がその蘊蓄を傾けて初めて社會問題に批判の筆を染めたときには、實際學界に異常な渦を卷き起こした。それまで誰しも單に學窮の巢窟とのみしか考へてゐなかつたところの最高學府から、突然、博士が敢然とその因習を踏み躙つて、(當時、教授の榮職を賭してと噂されたが、とにかく)初めて社會問題に侃諤の筆を揮ひ初めたのは、直ぐに社會のあらゆる階級に亘つて驚異と嘆賞の的となつた。そして、それは、そののち社會運動が盛んに勃興するために、どれだけの刺激と援助とを與へたか分からない。

ところが、それから世のなかは急激に變化した。社會問題は次第に純然たる實際運動と化して、隨つて、むかし先驅者、先覺者を以て目された學者や批評家やは固より、直接文筆でさういふ運動の指導の位置にある社會主義の元老連までが、いつとは無く運動の中心から少

しそれた横のはうへ置き去りにせられたやうな觀を呈して來た。

博士は、今も昔と同じやうに、その該博な知識と透徹した頭腦と、兩兩相待つて、無類の鋭い批判に一世を壓してゐるのであるが、しかし、それにも關はらず、博士自身にも、自分の擲げる石にどうも昔のやうな彈力が感じられなくなつて來た。そして、どうもそれは今後ますます甚しくなる一方であるやうな氣持が博士自身にもするのである。そこから博士は近ごろ心のどこか底のはうで頻りに急る何物かのあるのを感じてゐる。

机上の空論。さう。だが、机上の空論でなかつた學説や研究が昔から一體どこにあるだらう。さう思つて、博士は今でもしつかり自分の研究の立場を守つて迷はない。

「ただ汝の道を歩け。而して他人の評するに任せよ。」

マルクスの愛句であつたといふダンテのこの言葉が、博士の場合に於てもやはり磐石の重みを以てその心の礎を押へてゐる。にも關らず、心のどこか奥底から湧いて來る、ある極度に淋しい氣持は、どうにも抑へることが出來ず、また、それは實際どうにも爲樣のない性質の淋しさであつた。

今でも博士の講義は學生崇拜の的であり、また一方、實際運動に携はつてゐる人達の側からも、さういふ運動の先驅者、功勞者として、今なほ異常な尊敬を拂はれてゐる。更に加ふるに、博士はいまその畢世の大著『近世經濟思想史』の著作にその渾身の努力を集めてゐるので、これは前後數卷、實に彪然數千頁に亘る一大著述で、すでにその第一部『資本主義經濟思想史』の原稿は印刷所の手に渡つて、數名の門下がいま必死にその校正を急いで居り、次の第二部『社會主義經濟思想史』のはうもこれも着着進んで、博士の机上にはその出來上つた原稿が次第に山と積まれて行く。これが完成の日、學界不朽の一大名著として永く後世に殘るべきは已にもう疑ふ餘地がない。にも關はらず、博士の極度に明敏な頭は、その底に一道、實はまだそれは極く仄かにしか流れてゐないところの、その寂寥の氣持を決して見遁さうとはしないのである。そしてまた、實際それは決して直ぐに直接運動に携はる等のことによつて根絶させることの出來る性質の寂寥ではなかつた。

はじめ、固く禁煙の決心をした時にも、博士はやはり非常に淋しい氣持がした。ある名狀しがたい寂寥の感に打たれたものである。だが、それは、いま自分が感じてゐるやうな淋し

さとはまるで違ふ、どこか底に澄んだ力を持つた、ある力强い淋しさであつた。考へて見ても、どうもちよつと類似の見出せない、ある鋭い寂寥であつた。ところが、それに反して、迹でいよいよ禁煙を斷念したときに感じた、あのひどく淋しい氣持は、いかにも今の自分に親しさのある、言はば馴染みの淋しさであつた。近ごろ心の奥底で感じてゐるその淋しい氣持と、どこかに一脈相通ずるところを持つてゐた。そこで博士はひどく厭やな氣持がした。

la difficulté vaincu.（ラ・ディフィキュルテ・ヴァンキュ）　ふと、さういふ言葉が博士の頭に浮かんで來た。「手應へ」といふ言葉だつたと誰かの本で見た覺えがある。自分はいまその「ヂフィキュルテ」を失つてのでは無いかと博士は考へた。さうだ。確かにいま自分は總ての「ヂフィキュルテ」を失つたゐる。禁煙も、結局、ひとつの「ヂフィキュルテ」であつたが、それは見事にこつちから兜を脱いで了つた。

人間五十にして、總ての事柄に興味を失ふ怖ろしい危機が來る。ふとまたさういふ誰かの言葉を想ひ出した。博士は今年ちやうど五十歳である。

博士は、靜かに朝日の煙を薫らしながら、眺めるともなく窓の外を眺めた。昨日はしとし

とと雨が降つて、まだ春には少し早いが、それでも、もう何となく春雨らしい氣持のしたものである。それが今日は名殘なくからりと晴れて、拭つたやうな瑠璃色の空に白雲が二つ、動くでもなく動かぬでもなく浮いてゐる。見てゐるうちに、博士は何だかすつかりその珍らしい美しさに捉へられて了つた。

博士は近頃しきりに露西亞の小説を讀んでゐるが、そのうちに幾つも例の「トスカア」といふ文字が出て來る。心持ではよく知つてゐるつもりであるが、さて、はつきり言つて見ろと言はれると、どうも旨く言ひ現はすのに困る言葉である。そこで、念のために字引を引いて見た。すると、

「何か心の底で搜してゐるのは分かつてゐるが、さて、その搜してゐる對象が一體何であるか、自分自身にも捉へ得ないところから來る、或る焦（もど）かしい惱み。」

と、さうあつた。

博士はなるほどと思つた。そして、自分がいま心の底で搜してゐるものは、どうもあの雲のあたりに有るのではないかといふ氣持がした。

波の音。

松原の盡きるところに一つ好いくらゐの川があつて、その橋を渡ると、直ぐに縣道が海へ出る。僅かばかりの砂濱を隔てて直ぐ向うは濤の眞つ白い荒磯で、濤の音が轟轟と聞える。

このあたりから縣道の兩側がまばらな人家になるので、その入口から數へて二軒目の家がおます婆さんのやつてゐる木賃宿である。二間に土間の破家に「お遍路御宿」と好いかけん文字のはうは薄くなつて、反つて板の木目のはうがはつきりしてゐる、薄汚ない看板を下げて、そのまへに痩せた棕櫚の木が二本、しよろりと高く、貧乏くたく、門柱がはりに立つてゐる。

これは四國八十八ヶ所を廻る巡禮專門の遍路宿で、總じてこの遍路巡禮は、その食物が精進一點ばりの所爲と、それから、四五十日に亘るその旅のあひだ、雨風に晒され、蚤虱に責められて、その服裝の特に不潔なためと、または、癩病なんぞその好くない病人が多い所爲とで、普通の旅宿では決して泊めないことになつてゐる。「まるで遍路宿のやうだ」と、この地方では直ぐに汚ない家の譬に牽くくらゐで、その中ではこのおます婆さんの家なんぞはまだしもこれで綺麗なはうである。

婆さんは入口の縁側へ行李を持ち出して、俯向いて何だか頻りに掻き廻してゐる。六尺ゆたかの大女で、まだ腰も曲がらず、しやつきりして、頭には白髪一本目に立たず、それに昨夜の白粉が首のあたりにまだ班班に白く残つてゐる。ただ、婆さんの鼻は、長いあひだの黴毒で、鼻柱の中ほどで心もち低く節のやうに凹んでゐるのが、何となく異様に人目につく。

もう秋であるが、この南の國の海岸では、夕暮だと言ふのに、まだ薄寒いけしきも無く、海から吹く風は依然として温つぽく生温くい。

つい先達つて、この木賃宿から見すぼらしい葬式が一つ出た。それはこのおます婆さんの亭主と言へば亭主、まあ男妾のやうなものが死んだので、生れは紀州の者だと言ふことであつたが、やはりお四國遍路にやつて來て、ふとこのおます婆さんの家に泊つたのが元で、それからずるずるべつたりに、居るとも無くちやうど二年、婆さんと一緒に暮らしてゐたが、それがこのあいだ大して患ひもしないで急にふいと死んで了つた。

實はおます婆さんのかう言ふ「遍路亭主」はこれでもう丁度七人目なので、なかにはさう

して四年も一緒にゐた擧句、婆さんの隙を狙つて有金そつくり浚つて、やはりちやうど泊り會はせた女遍路の一人と駈落したのも有れば、または、さうして居るうちに、それまで隠してゐた下地の癇病が次第に現れて、有無を言はせず婆さんに追ひ出されたのもある。さうかと思ふと、一度なんぞは、まだ働き盛りの血氣の大男が、やはりさうして婆さんに引つ掛かつて、いつまで立つても家へ歸らず、しかもそれが國には整然とした女房子の有る一家の主人で、迹でとうとう國からわざわざ齢ごろの立派な息子が連れに出て來たのを見て、どうしてあんな分別盛りの大男がこんな薄汚ない黴毒婆に引つ掛かるのだらうと近所の者も不思議に言ひあつた。そして、それがまだ不思議なことには、かうした婆さんの「遍路亭主」は、來るのも來るのも殘らずが、まるで奴隷のやうに婆さんに扱き使はれて、掃除から煮炊きの世話から、どうかすると婆さんの腰の物の洗濯までやらされて、そして、その當の婆さんは、と言ふと、ただ、夕方その六十七の婆面にべつとり白粉を塗つて、唇には紅まで差して、白足袋がけで村はづれまで泊りの遍路の客ひきに行くのと、それから、寢しなにその「遍路亭主」に酌をさせて、ちびちび一杯やるのとだけが爲事である。

さう言ふ「遍路亭主」が婆さんの家で死んだのも今度でちやうど三人目で、そのたんびに婆さんは、わしは錢は一文もなし、葬式の出しやうが無いと、その時だけはいかにも尤もらしい顔をしておろおろ泣きつくものだから、いつでも已むを得ず近所隣で少しづつ持ち合つて、形ばかりでは有るが葬式を出してやつた。隨つてこの因業で多情な婆さんには、近所でももうとうから持て扱ひきつてゐるのであるが、やつぱり今度も婆さんのいつもの手にしてやられて、何しろ死んで了つた咄嗟の際にほかにどうにも爲樣がなく、またみんなで零し零し世話をやいて、そこで、出鱈目の法名を書いた紙の白旗を眞つ先に、その奇妙な葬式が婆さんの家を出た。

その實、近所の噂では、婆さんないない小金を貯めてゐるのだと言ふことで、實は今度も直ぐその迹で、その「遍路亭主」の弟といふのが國からわざわざ訪ねてやつて來て、婆さんには固より、近所隣の心附まで立派にして歸つたのであるが、婆さんはその近所の分まで猫ばばにして、一人でこつそり毎晩うまい酒を飲んで了つた。若い頃には二升でも三升でも平氣で飲んだくらゐの飲み助で、今でも一晩に二合なり三合なりの酒がなくては義理にも辛抱

の出來ない性分で、隨つて顏も體もまだつやつやと艶を持つて、ちよつと見にはどうして六十婆とに思へない。

ふと、前の縣道を走る俥の音がして、婆さんは顏を擧げた。

「駿ぢや無いか。」

思はず婆さんは立ち上つて見送つた。しかし、俥はもうずつと走り過ぎて、車上の客のうしろ姿も左右に搖れながら次第に向うへ遠く消えて行く。だが、その肩幅の廣い岩乘なからだ付が、婆さんにはどうも長男の駿太のやうに思はれた。

「ふん。駿のやつ、前を通つても、こつちを向きもしよらん。」

婆さんは、忌忌しさうにぶつかさ呟きながら、また家のなかへ這入つた。

婆さんには男の子が二人ある。だが、二人とも今ではすつかり婆さんと別れて了つて、いま神戸にゐる長男の駿太も、それから、これは直ぐ半里ばかりの隣村にゐる次男の信次も、どちらも、もうすつかり長いあひだの婆さんの不身持に愛想を盡かして了つて、と言ふより

も、寧ろ婆さんのはうから子供達のところへ出入りをするにも出來ないやうな義理にして了つて、今ではもう丸きり親子の縁を切つたも同樣になつてゐる。

おますの婆さんの家は、元はいま次男の信次がゐる村にあつて、その頃は近在きつての大造酒屋で、同時に有名な舊家であつたが、一人娘のこのおます婆さんと、それからその二人の息子たちとで、見る間に奇麗に潰して了つた。

婆さんは、生れ立ち非常に大柄で、十二三の頃からもう普通の十七八の娘より遙かにませて見えた。そしてまた實際人の驚くほどの美人で、同時にその頃からもう色んな男との噂が村ぢうの大評判になつた。十五の時に養子を貰つたが、それは、元のこの近鄕の庄屋の次男で、ただ極く人の好い、いつもにやにや笑つてばかり居る、一體ばかなのだか悧巧なのだか得體の知れないやうな男で、婆さん忽ち尻に敷いて、直ぐに家の使ひ男に手をつける、村の若い衆を引つぱり込む、果てはよその亭主と手に手を取つて公然お伊勢參りに行くほどの放埒にすつかり村の人人を驚倒させたが、その頃はまだ婆さんの兩親が生きてをり、殊にこの地方の鄕士で、恐ろしく一徹な父親と婆さんとは、三日にあげず衝突して、居竟の大男にも

珍らしいほど大力の婆さんが、すさまじい勢ひで摑みかかつて、組んづほづれつ疊襖を搖がして親子が爭ふ有樣は、さすがに見慣れた人人にもその度毎に目を睜らせた。

この父親は、斷髮令の出た時、この附近で眞つ先に髷を切つて手本を示した人で、それから、會津戰爭に羅紗の羽織に蝙蝠傘をさして歸つた姿が、當時すつかり附近の人達を驚かして、いまだに老人達の噂の種になつてゐる。

その父親が死んでから婆さんの放埒はますます募り、その上、間もなく好人物の亭主も死んで、長男の駿太が十五、次男の信次が十二になると、早くも二人は「國會」だの「民權自由」だの「板垣退助」だのと政治運動に夢中になつて、一ぱし志士氣取りで演說なんぞやつて飛び歩いてゐるうちに、家產のはうは家から屋敷から何一つ殘さず奇麗にすつて了つた。

そのうちに婆さんは今度はこの二人の子供たちと喧嘩を始めて、毎日のやうにそのどつちかと死ぬほどの激しい大格闘をやつたが、やがて、家が分散すると同時に、その子供たちとも別れて了つて、それから、あつちの男と食つ付いたり、こつちの男と駈落をしたり、その間には、その駈落先へ男をほつたらかしたまま一人でぶらりと歸つて來て、迹で男は首を縊

つて死んで了つたなどと言ふことも有つたが、しかし、もう歸つたところで誰も相手にする者がなく、困つた擧句は、夜になるとここの松原へ出て、村の若い衆たちに春を鬻いだりしたことまであつて、面白半分のいたづらな若者に暗闇まぎれに銀貨のかはりに石油罐の口金を紙に包んで摑まされたなどと言ふ話が今でも笑ひの種に殘つてゐるが、それがちやうど五十の年に、長年の惡病でやられて、殆ど死ぬほどの大患ひをやつた擧句、それでもやつぱり鼻の恰好が少し變になつただけで、命だけは助かつて、それからぶらりと四國西國の遍路に出たまま、今度は四年ほど一切歸つて來なかつた。

五年目に婆さんはまたぶらりと自分の村へ歸つて來た。同時に、今度はまるで自分の孫のやうな、しかも、それがいかにも小綺麗な若い男を一人一緒に連れて來て、またすつかり村の人人を面食はした。つまりこれが婆さんの「遍路亭主」の初まりで、この若い男が幾らか小金を持つてゐたのか、間もなく今の家を買ひ取つて遍路宿の看板を出した。その頃からもう婆さんはその若い男をまるで丁稚のやうに扱き使つて、自分は指一つ濡らさず、悠悠とひとり晩酌の酒を樂しんだ。そのうち、その孫のやうな「遍路亭主」が死ぬと、また同じやう

にそんな一夜泊りの男遍路を引つ掛けては亭主にして、婆さんもそれからはもうそこに腰を据ゑた。さう斯うするうち、いつか婆さん小金を貯めて、しかし婆さんは、それを預けもせねば貸しもせず、現金のままどこかへ隱して置いて、ただ、ときどき、そつと出して勘定して樂しんでゐるのだと言ふ噂がぱつと立つたが、しかし齡とともに募る婆さんの因業は實に無類で、いつか近所となりの者も婆さんをまるでほん引のやうに用心して嫌ひ合つたが、しかし婆さんは、人の顏さへ見ると、

「わしやお前、男の子が二人も有るけんど、二人ともあんぎやな不孝なやつぢやけん、ただの一文も助けて呉れるぢや無し、まあお前、よう生きて行けるつやうなもんよのう。」

と直ぐに泣言たらだら、しかし、無論、誰もそんなことを眞にうける者は無かつた。

ところで、二人の男の子のはうはどうかと言ふと、これは二人ともさんざん政治運動に失敗した擧句のはてが、弟の信次のはうは、これは偶然貰ひあてた女房が甲斐性もので、村で旅籠屋を始めたところが、何しろ信次がそれまで飛び歩いてゐる間に附近の有力者は大抵心安くなつてゐた關係から、官史なんぞの旅宿から大抵の宴會など殘らずここへ持ち込むこと

になつて、いつか暮らしもすつかり樂になり、信次は丸でただ一人で働く女房の後見同樣、遊んでゐても毎日毎日の一升近い酒に困らず、同時に、いつの間にか何か知れない一種の勢力のやうなものが生來剛愎で俠氣な信次の身のまはりに附いて了つて、今では村會議員と消防の取締といふ、何か村に事があれば眞つ先に立つて采配を振る役の、まづ博打を打たない親分といふ格で、附近に地相撲なんぞが有ると、親ゆづりの大酒に見事に太つた二十五貫たつぷりの體をどつしり四本柱に据ゑて、ひとりで貫目を示してゐる。

兄の駿太のはうは、これは初め横濱へ出て巡査をしてゐたが、一度、强盜が這入つたのを捕へに行つて、反つて自分のはうが嚇とのぼせて、さんざん渡り合つた擧句に、逃げかけた相手を物の見事に斬つて了つた。迹で死骸を調べて見ると、强盜はうしろから袈裟がけに斬られてゐたので、忽ち巡査は免職になり、おまけに暫く牢へぶち込まれて了つた。それから暫く保險會社の勸誘員をしたり何かしてゐたが、間もなく神戸へ移つて、或る紡績會社の事務員になつたのが振り出しで、それからだんだん出世して、今では地方から工女を騙り出す主任のやうなものになつて、その用事で、近頃は時時こつちへも歸つて來るやうになつた。

しかし、依然として二人は、まだ決しておまつ婆さんのところへは訪ねて行かなかつた。

元來、兄弟二人とも、大酒飲みの大荒武者で、また、どちらも、これまで隨分と亂暴な生活をやつて來たにも關らず、しかし、二人とも、ただ女のことで蹉跌を出したことだけは遂に無かつた。

ただ、弟の信次にたつた一度、それもついこのあひだ、かう言ふことが有つた。村へ浪花節芝居が懸かつたことが有つて、例のとほり信次がその興行の元締をやつたが、その一行のうちに玉子といふ女役者がゐた。ところが、間もなく興行が終つて、一座は直ぐにまた殘らず立つて了つたが、その當の玉子だけは、一人あとに殘つて、いつまで立つても立たうとしない。忽ち村の評判になつて、みんな色んな噂をし初めた。すると、信次は、一日女房を自分の部屋へ呼んで、非常に眞面目な樣子をして大體かういふやうなことを言つた。

今度俺は非常に妙なことをやる決心をした。しかし、お前は決してそれを止めたり何かしてはいけない。また、止めたりしたところで、決して何にもなりはしない。本當は俺もそれが善くないことだと言ふことは好く知つてゐる。しかし、さうするより他にどうにも爲方が

無くなつてやるのだから、どうか止めないで呉れ。實は今度俺は斷落をする。つまり、あの玉子と二人でどこか遠くへ行く。そして、もう決して二度とここへは歸つて來ない。俺は二千圓金を持つて出る。この金で、どこかで二人が食つて行ける爲事を搜し當てる積りだ。あとの物は、家も金も財産も、殘らずお前にやる。だから、どうか俺はもう死んだものと思つて諦めてくれ。そして、迹はまた他の男を入れるなりどうなり、お前の好いたやうにしてやつて行つてくれ。

大體そんなやうな事を、並はづれの大男の信次が、ちやんと兩手を膝のうへに突いて、實に嚴肅極まる態度を以て演說した。そして、餘りのことに唯だすつかり惘氣に取られてゐる女房を迹に殘して、本當に二人はその翌日村を出發して了つた。

それから二月あまり更に信次の消息は無かつたが、すると、一日、ひよつこり女房あてに端書が來た。見ると、それは大阪城の繪端書で、

「拜啓。其後變り無きや。先日より當地に參り居候。どうも當地にも良き爲事無之候。信次。」

と、ただそれだけ書いてあつた。すると、それから十日ほどして、突然、信次が自分の家へ歸つて家た。やはりその玉子と二人連れで村の入口まで歸つて來て、そこで持つて出た現金の殘りを一文殘らず女に呉れてやつて、そして女と別れて、信次はひとり俥で家へ歸つて來た。

「おい。いま戻んたぞ。」

さう言つて、やはり非常に眞面目な顏をして俥から降りた信次の顏を見ると、

「まあ。お前さん。はや戻んたかのし。」

思はず女房はさう口走つて、そして自分でもはつとした。だが、實際に女房は、あれほどまでに言つて出た夫が、もう歸つて來たかといふ氣がしたのである。しかし、信次は、やはり非常に眞面目な態度で奥へ通つて、そしてやはり非常に改つた樣子をして女房に、さて、今度のことは俺が實に惡かつた、これは俺の非常な考へ違ひだといふことが分かつたから、俺はまた斯うして歸つて來た、どうか許して呉れ、とさう言つて、ちやんと女房のまへに手を突いて頭を下げた。しかし、その信次の樣子には、少しも極まりの惡るさうな樣子も無け

れば、具合の悪るさうな所も無く、ただ嚴然端然と嚴肅を極めてゐた。女房は思はず聲を擧げて泣き伏して、暫くはどうしても顏をよう擧げなかつた。

その相手の女役者は、間もなく村の繭の取引人の女房になつて、今でも同じ村で機嫌よく暮らしてゐる。そして、人の好い信次の女房は、その後も夫の目を盜んでは隨分いろいろとその面倒を見てやつた。

とにかく、この事件が兄弟二人あひの後にも先にもたつた一つ女に關する失敗で、その他はむしろ皆で、あの母親の子でどうしてああなのだらうと噂しあふくらゐに、二人ともさう言ふはうには超然としてゐた。隨つて、二人とも昔から母親のさう言ふ氣違ひじみた不身持を憎むこと實に限りなく、殊更、人一倍負け惜しみの強い二人の性質は、常からまるで唾棄したいほどに思つて來た。

「さあ。どうぢや。もう一つ。」

信次は燗徳利を取り上げた。

「うん。まだ有る。」

「まあ、やれ。熱いのが來た。」

その翌晩、信次の家の奥座敷で、どつちも浴衣がけの信次と駿太とが、杯盤をなかに眞つ赤な顏をして互ひに寛いでゐた。

昨夜おます婆さんがそれかと夕闇のなかに見送つたのは、やつぱりその長男の駿太だつたので、駿太は、また例のとほり社の用事でつい近所まで來た序に、僅かの閑を見て弟の家を訪ねたのである。

「おい。今ごろ遍路の鈴の音がしてる。」

「うん。宿でも取り損なうたのぢやらう。さあ。一つやれ。」

「うん。」

駿太は受けて一口やると、また杯を置いて耳を傾けた。ここまで來ると、海は廣い一面の松原に隔てられて、もうずつと遠くになつてゐるので、隨つて波の音ももう極く微かにしか聞こえない。その間に、次第に遠くへ行くらしい鈴の音が一つ闇のなかから聞こえて來る。

「どうも何だね。この波の音だの遍路の鈴の音だのと言ふものを聞くと、どうも何とも言へん氣になるよ。やつぱり故郷といふものは妙なもんだ。」

駿太はまた杯を擧げた。駿太は、昔は大酒ぞろひの一家のうちでも誰にも劣らぬ豪酒であつたが、それが、十二になつた長女の道枝を突然急性肺炎に取られて間もなく、何と思つたのか、酒も煙草も一度にやめて、それから五六年の間といふものは、それこそ一滴の酒も口に入れなかつたが、しかし近頃はさういふ一徹な氣質がよほど和いで、今でも自家では決して酒を置かないが、人に勸められれば二合や三合の酒は平氣で飲むやうになつた。

「實は何だ。俺は一時あの遍路といふやつを殘らずやめて了つてやらうと思つたことがある。」

「さうか。それは面白い。一體いつ頃のこつちや。」

「うん。もう大昔のことだ。何でも板垣さんについて廻つてゐた頃だ。どうもあんな迷信はいかん、あんな迷信があるやうでは、いつまで立つても政治なんぞは進歩しないから、一つ殘らずやめて了つてやらうと決心した。」

「あはははは。お主の考へさうなこつちや。」

信次は、すつかり嬉しさうに、大きな腹を搖つて笑ひ出した。

駿太は、さすがに横濱や東京をほつつき廻つて來ただけに、大分東京辯が勝つてゐるが、信次のはうは、これはいつまで立つても田舍言葉まる出しである。おまけに、二人とも、むかし天下國家を奈何せんと豪語した癖がいつまで立つても取れないで、憤つたやうなその口の利き方は、ただの時でも、知らない者が聞くとまるで喧嘩のやうに聞こえる。

「うん。時に實はお主に相談しようと思うちよつたがね。例のおふくろの一件ぢや。」

今度は信次が杯を下に置いた。

「うん。また遍路が死んださうぢや無いか。」

「死んだ。そこで、一つこの際うまく說きつけて、俺が引き取らうかと思ふがね。どうぢやらう。婆さんももう大抵弱つちよるぢやらうと思ふんぢや。」

「うん。」

「實は、これまでに俺もさう思うてね、何遍も行て話したことが有つたんぢや。何しろあ

れぢやお互ひに不體裁でね。」
「うん。確かに不體裁ぢや。お互ひに人なかへ顔出しも出來ん。」
「ところが、婆さんどうしても承知せん。あんな腐れ遍路なんぞ早く敲き出して俺くへ來いと言ふとね。婆さん直ぐに目の色をかへて、腐れ遍路とは何ぢや、不都合なことを言ふな、假りにも母親の亭主ぢや無いか、お主くへ行たち、お主にあの遍路の代りが出來るかと、かう言ふんぢや。」
「ふん。實際困つた婆さんだ。ありや全く色氣違ひだね。」
「うん。ぢやが、今度はもう好からうと思ふんぢや。何たち、お前、もう六十七ぢやけんね。もう大抵婆さんも弱つちよるぢやらう。そこで、お主が戻んたら一つ相談して俺が引き取らうかと、この間から思うちよつたとこぢや。」
「うん。」
「お主さへ好けりや、直ぐあすにでも俺が行かう。」
二人はまた默つて暫くただ盃の滿を引きあつた。今夜は宴會でも有るのか、臺所で喧しく

皿小鉢の鳴る音に混つて、表座敷のはうで頻りにがやがや人聲がする。
信次の女房も、ときどき燗の熱いのを持つて來るだけで、それも德利を置くと直ぐ氣を利かして下つて了ふ。二人は久し振りに隔ての無い目を見合はした。
「よし。それぢや一つさうして呉れ。」
突然、駿太が突拍子も無く大きな聲を出して、改まつて大きく坐り直した。
「本來ならば、これは俺がしなくちやならん事ぢや。勿論、長男の俺が婆さんを連れて行く可きだが——。」
「いや。お主が連れて行たち、どもなりやせん。あんぎやな婆さんを神戸くんだりまで連れて行てどうなるもんかね。また、婆さんも行きやせん。婆さん、俺よりもまた一段お主を怖がつちよる。あはははは。」
駿太も思はず苦笑して、
「何しろ俺のすべきことを殘らずお主になすりつけて、何とも濟まんわけだが、さう言ふわけなら一つさうしてくれ。實は俺もその事がいつも氣にかかつて爲方が無かつたんだ。

何しろあの齢では、もういつ何時どんな事があるか分からん。出來るなら俺もどうかして子供の家で死なしてやりたいと思つてね。たとへどんな親にしろ、あれが萬一他人の眞ん中で死んだとなると、二人とも一生寢覺めの惡ひ思ひをしなくちやならん。」

「うん。俺もそのことよ。それさへ無けりや、何もこんぎやに心配もすりやせんのぢやがね。うん。そんなら直ぐにあす俺が行つて來う。」

信次はごまかすやうにぐつと一杯飲み干した。二人とも目のうちが何だか少し潤んでゐるやうである。

「どうぢや。一つ。お主や近頃またばかに弱くなつたね。」

「うん。」

「一體どうしたんぢや。近頃まるきり力が無いぞ。」

「うん。もう齢のせゐだらう。」

駿太も弟と顔を見合して苦笑した。

「ばかを言へ。今からそんな事を言うてどうするか。まだこれからぢや無いか。」

信次はまるで叱咤するやうに眞つ赤な顔で兄を睨みつけた。しかし駿太は何とも言はなかつた。ただ靜かに杯を擧げてゐる。

「おい。お主や耶蘇になつたか。」

突然、信次が聲を低くして藪から棒に聞いた。

「いや。そんな事はない。」

駿太も思はず愕いて、強く首を振つた。

「さうか。それでも、耶蘇の本があるぢやいか。」

信次が隅のはうを膀でしやくつて見せた。

「うん。あれか。あれあ。」

駿太は思はず苦笑した。同時に、むづと立つて、疊んだ洋服のうへから小型の聖書を持つて來て、またどかりと胡坐をかいた。

「これは聖書よ。」

信次のまへへ無造作に拋り出した。

「聖書ならやつぱり耶蘇ぢや無いか。」

信次は、何だか汚れたものに觸れるやうに、それを取り上げた。

「うん。だが、俺あ耶蘇ぢや無い。ただ聖書を讀んで見ただけだ。」

「さうか。」

信次は何心なくそれを明けて見た。偶然、『約翰傳福音書』の一番最初のところが出た。見ると、眞つ赤に傍線を引いてある。

「太初に道有り。道は神と共に在り。道は即神なり。へえ。これを道と讀むのか。」

「うん。さうと見える。俺も分からなかつたから『玉篇』を引いて見た。そしたら、道といふ意味が有ることは有るね。」

「ぢやが、これあ一體何のこつちや。」

「いや。俺にも分からん。さつぱり分からん。」

駿太は突然ひどく陰欝な顔をした。

「一體、耶蘇てどんぎやなもんぢや。」

「いや。俺も知らん。第一、俺は神といふものが丸で分からん。」

「さうか。一體、神といふやうなものが實際有るもんかね。」

「いや。どうも分からん。まるで見當がつかん。」

「一體、お主やいつからこんなものを讀み出したんぢや。」

「これか。これあ何だ。あの道枝に死なれた頃からぢや。」

「ああ。さうか。あれからか。あれあ實際惜しいことをしたね。」

二人はまた默つて唯だちびちび杯を擧げた。二人とも、さつきからもう隨分飲んだので、どつちも常から赤い逞ましい顔を更に眞つ赤にして、どつしり趺で相對してゐる。

すると、駿太が突然しみじみ話し出した。

「實を言ふと、俺はあのとき實際何とも言へん氣がしたんでね。俺はあれまでまだ世のなかにあんな辛いことが有るといふことを知らなかつたんぢや。いくら子に死なれたと言つて、あれほどの氣持のするものだとは夢にも思つてゐなかつた。それまでは俺は耶蘇だの神だのといふことは考へても見なかつた。第一、俺はそんな牛酪くさいことは大嫌ひだつ

た。」

「うん。俺も大嫌ひだ。今でも俺あ大嫌ひだ。あつはつは。」

「ところが、丁度そのとき演説會があつてね。それに耶蘇も出るんだ。」

駿太は信次の樣子に頓着なく話し續ける。

「その廣告を見たときに、俺はふいと一つ耶蘇てどんなものか聞いて見ようかと言ふ氣になつたんだ。」

「ふん。つまり魔がさしたんぢやね。」

信次は、まるで兄がいま現に誰かに誘惑されかけてでもゐるかのやうに、爛爛と目を輝かして睨みつけた。

「さうかも知れん。だが、その時はただ禁酒會の演説だつた。」

「ああ。さうか。それからお主や酒をやめたんぢやね。」

「うん。ところが、どうもそれが不思議でね。あれはいま考へてもどうも不思議だ。」

「不思議て、一體、何が不思議ぢや。」

「うん。俺はあれまでまだあんな演説を聞いたことが無かつた。昔から隨分えらい人間の演説も聞いたが、どうもああいふのとはまるで違ふ。小さな聲でほそほそやるんだが、それがどう言ふもんだが不思議に胸に殘るんだ。」

「へぇ。さうかね。そんなに人を動かす力が有るもんかね。」

信次はをかしな顔をして兄の顔を見た。

「うん。どうもあれは妙だよ。そこで、俺は耶蘇といふやつは妙なもんだと思つて、早速こいつを買つて來て讀んで見た。ところが、讀んで見ると、どうもさつぱり分からん。何だか善ささうなことも隨分書いてあるが、さうかと思ふと、またばかに怪しいことが書いてある。」

「そりやどうせさうだらう。どうせ耶蘇ぢや無いか。」

「うん。だから、俺は今でもまるで分からん。」

「さうか。つまりお主やまだ耶蘇ぢや無いんぢやね。」

「うん。耶蘇ぢや無い。聖書はときどき讀むが、耶蘇ぢや無い。」

「さうか。それでやつと安心した。耶蘇なんぞになるな。あはははは。」

信次はまた大きな聲で笑つたが、しかし何だか變に不安であつた。そして、兄貴ももうすつかり耄碌したと、一人つくづく歎息した。

「だが、お主も氣が弱つたもんぢやね。」

「うん。どうもいかんね。」

駿太も強く首を振つたが、しかし、その日にやけた太い首は一向いけなさうにも見えなかつた。

「それに、どうも、第一、近頃は物に迷つていかん。」

「さうか。迷ふつて、一體、何に迷ふんぢや。」

「うん。何にもかにも迷つていかん。自分のやつてる事が殘らず惡いことのやうな氣がしていかん。」

「厄介ぢやね、そりや。一體どんなことが惡いんぢや。」

「例へば、かうして俺が工女を連れて行くだらう。ところが、あいつらは都會へ出て決し

て善いことを覺えはしないのだ。それはなかで見てゐるだけに誰よりもよく知つてゐる。風儀は紊れる。健康は惡くなる。歸つて來る時には、もう一生とり返しのつかんからだになつて歸つて來るのだ。第一、見るが好い。肺病なんて病氣はあれあ前にはここらには絶對に無かつた病氣だ。」

「うん。そりや確かにさうぢや。ぢやが、そんな事は爲方が無いぢやないか。文明にはそりや色んな弊害が伴ふぢやらう。一利あれば必ず害ありぢや無いか。」

「いや。そんな事はない。さう思へたら、そりや好いのだ。少くとも俺はさう思へん。自分でそんな職業に就いてゐるのは厭やだ。どうも氣が咎めていかん。そこで、俺はいろいろ考へて見た。働くことは幾らでも働くから、何か自分で氣の咎めんやうな爲事は無いかと思つて、一所懸命に考へた。ところが、さてさうなつて見ると、さう言ふ爲事は無いんだね。ちよつと見ると好ささうでも、さて、なかへ這入つてよく見ると、結局どれもこれも五十步百步だ。結局、俺は百姓をするか、で無ければ、坊主にでもなるより他に爲方が無いと考へた。」

「あははは。それ見い。まさか百姓や坊主にもなれんぢやらう。」
「いや。俺は實際一時は本當に百姓でもしようかと考へた。」
「これは愕いた。坊主にならうたあ思はざつたか。」
「いや。それも考へた。實際、坊主にならうとも考へた。」
「これあますます愕いた。俺はあの大江卓が坊主になつて行脚に出たのでも愚の骨頂ぢやと思うちよる。隱遁なんて、ありや時代に負けた意志の薄弱な人間の逃げ道ぢやと思うちよる。ぢやから俺あ今でも板垣さんが好きぢや。幾ら苦しめられても、板垣さんは決して逃げようとせざつた。」
「うん。だが、どうもさう思ふと、何もかも面白くなくてね。何をやつても、どうも氣が乘らなくていかん。」
「そりやさうぢやらう。ぢやが、つまりお主は考へ過ぎるんぢや。知るは憂ひの初めなりと言ふぢや無いか。」
むかし政治運動に夢中になつてゐる頃から、駿太がいろいろ政治の原理などを論じて行く

のに反して、信次のはうは、これは熱烈一方、運動一方、そんな小むつかしい理窟は俺には分からんと、その頃から兄貴に一目置いて來た。いま駿太の話を聞いてゐるうちに、やはり兄が、不斷自分などがまるきり考へもしない事を考へてゐるところから、何となく兄が傑く見えて、そして自分でひどく不安な氣になつて了つた。
ふと、かういふ風にして行つて、了ひに兄は氣でも違ふのでは無からうかと、さう思つて信次は思はずどきりとした。彼等の祖父の弟、つまり彼等の大伯父は、若い頃から儒學に凝つた擧句、遂にはまるきり一間から出なくなつて、とうとう氣違ひ同樣の死に方をして了つた。彼等兄弟にも、やはりその血が流れてゐる。
「つまり、さう言ふのが哲學といふものぢや無いのか。」
「哲學。いや。俺は哲學は知らん。どんなものか丸で知らん。」
駿太は決然と強く首を振つた。
その翌朝、信次は早速おます婆さんのところへ訪ねて行つた。

その迹で駿太は一人ごろりと横に寢そべつてゐた。今度はいかなあの婆さんでも、もう大抵信次の所へ來るだらう。とにかくそれで一つ片づいた。さう思つて、思はずほつとしたやうな氣持になると同時に、不思議に駿太は何か一度に張合が拔けて了つたやうな變に儚ない氣持に襲はれて了つた。同時に、彼が極くまだ幼い頃からのこの母子三人の長い生涯が、世にも奇異に不思議に、しかも一度に彼の目のまへに蘇るやうな氣持がした。

ふと聞くと、遠くで波の音がする。ときどき、どおんどおんと砂濱に碎ける音が聞こえて來る。聞くとも無く聞いてゐるうちに、駿太は突然また何とも言へない氣持に襲はれた。

生れ落ちると直ぐからもう聞きなれた音である。腕白盛りの頃には、前の廣い松原で戰爭ごつこをやりながら聞いた。その頃は彼等の家の大きな屋敷にはまだ白壁の庫が幾つも並んでゐて、板垣退助や林有造や大江卓のやうな名士がやつて來ると、いつもその旅宿にあてられた。

さうだ、かう言ふことも有つたと、ふと駿太が想ひ出した。一日、駿太が奥座敷で一心に『自由の凱歌』のバスチィユ牢獄破壞のところを讀んでゐると、そこへ丁度その頃滯在中の

板垣退助と一緒に散歩に出てゐた弟の信次が、そつと歸つて來て、まるで呼くやうな聲で兄に言つた。

「兄やん。板垣さんは、そりや狙い人ぢやぞ。こりや。」

さう言つて、彼の鼻のさきに死んだ雀を一羽さし出した。一體、何のことかと聞いて見ると、いま二人で松原のなかを拔けかけると、雀が群がつてゐた。すると、板垣退助は石を拾つて投げつけた。ところが、それが誤たずその一羽に中つたと言ふのである。

「板垣さんはそりや狙い人ぢやけんね。」

その時、目をくるくるさして、すつかり感嘆した弟の樣子を想ひ出して、思はず駿太は一人ほほ笑んだ。

それから政治運動に病みついて、二人とも夢中になつて東奔西走する頃には、大抵どこかの料理屋かなんぞで、大杯の滿を引きながら聞いた音である。だが、その頃は波の音なんぞはまるで耳にも入らなかつたと駿太は想ひ出した。

門ではまた一しきり遍路のとほる鈴の音がする。

間もなく信次が歸つて來た。

「おい。いかんぞ。またいかんぞ。」

信次は、づかづか庭敷へ這入るなり、むくれ返つてどかりと坐つた。

「さうか。婆さんまだ來ると言はんか。」

「來るどころぢや無い。もうちやんと遍路の代りが來ちよるぢやないか。」

「さうか。もう代りが來てるんか。」

いきなり信次は、まへの瀬戸物の灰皿を取つて、力任せに横の硝子戸へ敲きつけた。二枚重ねて明けてあつた硝子戸が、がちやんと荒まじい音を立てて粉微塵に毀れて、灰皿はどこか庭のはうへすつ飛んだ。

「ばかばかしい。餘まりむしやくしやしたけん、ひとつこつぴどく張り飛ばして戻んち來た。」

信次は、どたりと仰向けに倒れて、兩手を頭の下で組んだまま、もう凝つと目を閉ぢて動

なかつた。

「まあ、お前さん、どうしたがぞのおし。」

今の音に愕いて這入つて來た女房が、ただ惘氣に取られて、入口に立つてゐた。

その翌日、駿太はまた車で信次の家を立つた。

例の縣道の橋を渡つて松原を出ると、からりと目のまへに晴れた秋の海が見えて、波の音が俄かに高く耳を打つ。婆さんの家のまへを通る時に、車の上から覗いて見たら、婆さんの姿は見えなくて、なるほど色の生白い中年の男が頻りにそこらを掃いてゐた。

駿太はここから一里ばかりの港から汽船に乘るのである。

かうして嬰兒がこの世へ生れた。

ある好く晴れた日の朝のこと、美芳屋の主人は錢湯の流しで頻りに六歳ばかりの病身らしい女の兒の背を流してやつて居た。

美芳屋と言ふのはこの學生町の文房具屋で、主人は四十恰好、大兵肥滿の大毬栗坊主である。太く短かい首、いかにも酒飲みらしく燒けた赭い胸毛のあたり、それから、見事に突き出た大きな腹、だぶだぶ餘つてゐる腿の肉、何だかボンチ繪を見るやうである。

風呂場は、父子の外にはまだ誰も客がなく、がらんとして、脫衣場で番頭が頻りにその日の新聞を擴げてゐる。

「お出でやす。」

がらつと威勢よく入口の扉の明く音がして、誰か客が來たらしい。

「お早う。」

「へえ。お早うさん。」

「どうだす。好えお天氣やおまへんか。外はもう丸で春だつせ。」

着物を脱ぎ脱ぎ番頭相手に話すらしいその元氣な大阪辯を聞くと、美芳屋は、どう言ふわけだか、思はずどきりとして、娘を洗ふ手を留めた。

「昨日ちよつと傍を通りまひたがな。何だつせ。圓山の櫻も南側の枝はもう餘ほど蕾に色が着いてまつせ。あの分やつたら今年は案外早よ咲きまつしやろ。北側は明かん。まだ全と明かん。頑固なもんや。ほう。そいでも、まだやつぱり裸になると寒むあすな。寒む、寒む。」

がらりと風呂場の戸を明けたが、中の美芳屋と顔を見合はせると、突然、

「やあ。これは。」

思はず恟くりして棒立ちに立ち留まつたが、

「はあ。お出でやす。」

美芳屋が俄かに拵へたやうな笑顔をしてさう言ふのを丸で相圖のやうに、

「お出でやす。早あすなあ。」

これも俄かに元氣な聲を出して、

「御免やつしや。」

威勢よく湯槽の湯を汲みかけた。

これはまた美芳屋と並ぶとをかしいくらゐ痩せつぽちの小男で、見たところまだ三十を越したか越さないか位だと思はれるが、それが、どう言ふものだか、もうすつかり頭の毛が薄くなつて了つてゐる。長めに延ばして分けてはゐるが、それがうしろの方は丸きり頭の地が現れてゐる。これは同じ町の弘文堂と言ふ古本屋で、根が大阪者だけに今でもまだ言葉が大阪丸出しである。

「好え陽氣になりまひたなあ。」

照れ隠しのやうに弘文堂がやはり元氣な聲で話しかけた。

「へえ。急に暖たこなりまひたなあ。」

「そいでも、まだ斯んなこと有らしまへんやろな。こら餘まり溫く過ぎまんな。」

弘文堂は美芳屋の方へ背を向けて、顔だけ湯槽から出してゐる。

「へえ。そらさうどすとも。まだ斯ないなこと有らしまへんで。」

「さうだつしやろな。何たかて、奈良のお水取りがまだ濟ましまへんさかいな。」

「左樣。左樣。その迹にまだ比良の八荒あれ了ひちうのがおすがな。それからどすな。ほんまに溫くなんのは。」

二人とも、見かけは愛想の好い調子で話して居たけれども、何しろ昨日のことの有つたところなので、どつちも實はすつかり照れて了つてゐた。

「ああ。さうさう。こないだは大きに。濟みまへなんだ。」

ふと思ひ着いたやうに、美芳屋が重い口で言ひ出した。

「へつ。何だした。」

弘文堂は恂くりしたやうに、金窪眼をくるくるさして振り向いた。

「へえ。あの野球の寄附金どす。大きに。」

「はあ。あれだつかいな。へえ。行き屆きまへんことで。どうだした。好う集まりまつか。」

「へえ。お蔭でぼつぼつな。」

これは、近日三高の野球部が對一高戰のために東上する。そこで、附近の不斷學生相手の商人達は、日頃の義理合上からめいめい幾らかづつ持ち出して、應援費の寄附をする。美芳

屋はその世話方をやつて居るのである。）

美芳屋は、初めは全くお得意の書生さん達へのお追從から、いろいろ野球の世話を燒いたり仕合を見に行つたりし始めたところが、いつの間にかすつかり面白くなつて了つて、とうとう本物の野球狂になつて了つた。殊に、仕合の迫つた近頃は、一日も缺かさず高等學校の運動場の一隅にしやがんで、選手達が命がけの猛練習をやつて居るのを一心に傍から眺めて居る。そして、ときどき選手達と親しい口を利いたり、先輩と昔の仕合の話をし合つたり、それが美芳屋には何より愉快で、また何よりの自慢である。

「何せ、あんた、近頃はやり切れまへんがな。むかし二錢やつた石油のブリキ鑵が今年あたり三十錢からするのどすさかいな。」

「へえ。さうだすかな。あの、がちやがちやや振るやつだんな。へえ。そら、やり切れまへんな。どうだす。今年は勝ちまつしやろか。」

「へえ。まあ勝ちたいと思てますのやがな。何せ二年續けて負けてますさかいな。今年は勝たんなりまへんわい。と言つたところで、こら、どうも、やつぱり運もおすさかいな。」

「さうだつしやろな。運がおつしやろな。」

弘文堂はがばりと上つて流し場へ出て來た。

「そいでも、今年は投手が宜しさかいな。」

「さうだんのやてな。投手、山根だしたな。」

「へえ。山根。そら旨うなりまひたで。好え曲球出しよる。それに、第一あんた、球速がおすがな。肩が宜しがな。」

「へえ。さうだつか。」

野球の話になると、美芳屋はすつかり景氣づいて了つた。弘文堂は顔ぢう石鹸だらけにして、せつせと洗つてゐる。この方は野球には餘り興味が無いらしい。今度は美芳屋が入れ代つて娘を湯槽へ抱き込んだ。

「そいでも、あんたはん、ほんまにお好きだんな。わたい實際感心してまんのやがな。こないだもさう言ひましたのやがな。美芳屋はんに用事やつたら、のつけに自宅へ行たかて明かん。景初に一ぺん三高の運動場へお行き。そこに居いへなんだら、その時お内へお行きやす

てな。」

「あつはつは。ほんまにその通りどす。」

美芳屋は湯のなかで得意らしく笑つた。それでも、野球の話が出て餘つほど兩方の調子が好くなつた。弘文堂もまた湯槽のなかへ這入つて來た。

「はあ。いつ見ても、見事なおからだや。隨分と掛かりまつしやろな。」

「へえ。もうてんと明きまへん。一頃は二十五貫の上もおしたがな。もう二十貫が切れまつしやろ。」

「はあ。そいでも大したもんや。ざつとわたい等の倍やがな。」

美芳屋のその鞭鞭たる腹のあたりを眺めて、弘文堂はふと變な顔をした。

昨日のことと言ふのは、實はかう言ふわけである。

去年の夏のはじめ頃から美芳屋は妾をひとり世話をして居る。美芳屋の女房と言ふのは、二年ほど前から脊髓で半身不隨になつて了つて、今では寢たり起きたり、自分のからだの始

末をするのがやつとである。美芳屋には子供が三人あるが、三人が三人揃ひも揃つて女ばかりで、一番上が十六、その次がいま小學校へ通つて居り、一番下が今この風呂へ連れて來てゐる腺病質の子供である。家事の事から二人の妹の世話、それから店の商賣まで、殆ど上の娘が一人で切り廻してやつて居るのである。

女房が癈人になつた頃から、ぼつぼつ芳美屋の遊びが始まつた。ときどき宮川町や膳所裏の蔦や桔梗を染め抜いた淺黄の暖簾を潜ることがある。しかし、根が非常に吝な性分だから、決して遊ぶと言ふほど遊びはしない。泊つて來ることなんぞ、無論ただの一度も無かつた。

實を言ふと、美芳屋自身も、遊んで見たところで、どうもそれほど氣が乘らない。歸りにはいつも極つてひどく莫迦莫迦しい氣持がするのである。

美芳屋は、酒は好きであるが、酒量は見かけに據らず極く少いはうである。家でときどきやる晩酌にも、一合つけるといつもきつと多すぎる。五勺と少しくらゐでちやうど陶然と醉つて來る。そのうへ飲むと、きつと直ぐ苦しくなる。恐らく餘り太り過ぎてゐて、心臟が弱

つて居るのであらう。ところが、遊びとなると、まさかに五勺つけろと言ふわけにも行かない。默つて居ても、二本や三本は仲居が持つて上つて來る。敵妓も飲まない時なんぞ、ずゐぶん仲居が助けたと思つても、それでも大抵二本そつくり殘つて了ふ。吝な美芳屋は第一それが何よりも莫迦らしい。まだ實の有る重い銚子をそのまま仲居が兩手に一本づつ持つて降りて行くのを見ると、實際、美芳屋は何とも言ひやうのない情ない氣持になるのである。時には復たそのあべこべに、ひどい飲助の敵妓にぶつかつて、見るから野呂間の美芳屋は散散の目に遇つたなんと言ふこともある。そのほか、人一倍機嫌屋の美芳屋は、少しでも大事にされない風が見えると、直ぐお冠を曲げて了ふ。ところが、誰も斯んな嵩つたれのお客を特に優待するわけのあらう道理が無い。何やかや、數へ立てれば面白くない事だらけである。おまけに、いつの間にか美芳屋は「俄雨に逢はばつた達磨はん」と言ふ恐ろしく長い綽名を附けられた。そこへ復た一人ひどく活動の好きな反ねつ返りの娼妓がやつて來て、美芳屋の前でも構はず「でぶさん、でぶさん」と呼び出した。

美芳屋はすつかりうんざりして了つた。「娼妓買ひ」がすつかり厭やになつて了つた。そ

れでも出掛ける時には、何か面白いことがありさうで、つい樂しみにして出掛けるのであるが、さて行つて見ると、いつでもひどく不機嫌な氣持で歸つて來る。

「へつ。しやうむ無い。」

迹で考へると、何だかまるで金を池のなかへでも投げ込んで來たやうな惜しくて堪らない氣がするのである。

そこへ偶然妾の話が持ち上つた。それはここからは川向うになる或る化粧品屋の後家さんの世話で、美芳屋は文房具屋には珍しく自分の店で化粧品を賣つて居ないので、いつからかこの店でライオンの得用大袋と石鹸と齒楊枝とを買ふことに極めて居るのである。

東山一帶燃えるやうな若葉に埋まつて了つて、麗かな日の差した京都の街街は何だか變に林として、まるで眠つたやうに靜まり返つて居るそのなかを、それでもまだ何となく爽やかな風の亘る初夏の或る日の午すぎ、御所の南の方に當るある小さな横町を、セルの着物に同じ羽織を重ねて、角帶雪駄ばきと言ふひどく粧した形をした美芳屋が頻りに行つたり來たり

して居た。

このあたりは蒔繪や細工物の居職人の多い所で、傾いた低い格子戸は夏でも締めつ切りの家の多い中に、一軒立ち混つて、圓い眞つ赤な看板を突き出した煙草屋だけが店を明けて居るのが、何となく目立つて見える。美芳屋はさつきからもう二三度もその前を通り過ぎた。店には二十五六の色艶の惡い小柄な娘が一人、横むきになつて何か針爲事をして居る。それでもその黑襟の着物と少し頽れた銀杏返しとが、美芳屋の眼には何となく艶めいて映つた。

「ふん。案外おとなしさうな娘や。それに家も堅さうや。」

とうとう思ひ切つて、入口の硝子戸を明けた。

「お出でやす。」

娘は懶るさうに仕立物から顏を擧げた。

「朝日を一つお呉れやはんか。」

娘が立つて棚の煙草を取つて居るうしろ姿を眺めながら、美芳屋は、

「こら惡ないがな。さうやな。唯だちよつと愛嬌が無いか知らん。」

そんな事を考へた。

「一本つけさしとくれやすや。」

美芳屋が一本拔き出して火鉢の傍へ持つて行くのを、

「どうぞお持ちやしてお呉れやす。」

剩錢を勘定してゐた娘は、手を延して、小さなガラ燐寸を一つ美芳屋のはうへ押し出した。

「さうどすか。そら濟みまへんな。」

その頃は煙草屋で燐寸を添へる家と添へない家とまちまちであつた。客な美芳屋は、煙草を買つて燐寸が貰へないと、いつでもひどく厭やな氣持がした。

「へえ。大きに。」

「毎度大きに。お出でやす。」

外へ出て、も一度振り返つたら、娘はもう爲事にかかつて一心に俯向いてゐた。

「へへ。何にも知らへんのやな。見られてゐるの知らへんがな。」

美芳屋は卑しく笑つてつぶやいた。

「そいでも、ここは好えわ。こら好え。誰にも見られへんのが好えがな。それに第一、こんだけ内と離れたるのが好え。」

美芳屋は立ち留つて、そつとあたりを見廻した。横町にはいま人の姿一つ見えなくて、どこか遠くの角を廻るらしい電車の軋る音と、近所でこつこつこつこつと何かの手職の音が連續して聞こえるだけである。

「檀那はん。あの、檀那はん。」

遽ただしく娘がうしろから駈けて來た。美芳屋は惚くりして振り返つた。

「檀那はん。お忘れ物どつせ。」

娘は石鹸の包を差し出した。

「へえ。こら、こら濟みまへん。さうどしたか。つい、うつかりして。へえ。こら濟みまへんなんだな。」

美芳屋はすつかり相好を頽してへいへい禮を言つてゐる。

「滅相な。檀那はん。」

娘はにつこり笑つて行つて了つた。

その翌月から美芳屋はこの煙草屋へ通ひ出した。毎週月曜日に一度づつ、つまり月によつて四度のことと五度のことがある。月曜と云ふのは美芳屋の店の一番ひまな日で、その午すぎから美芳屋は着物を着替へて出掛けて行く。手當は月二十五圓こつきり、外に一切くされ無しと言ふ約束である。

煙草屋は五十ばかりの見るから貧相な母親と娘と二人暮しで、下が店と奥と臺所、それに二階が二間だが、その一間のはうは物置代りに使つてゐるので、本當は一間も同じことである。この二階の一間が美芳屋の落ち着く部屋で、いつもは婆さんが洗濯物を抱へて物干へ出る通り路である。煤けた天井、破れた襖、それから、かういふ京都の家にお極りであるが、天井の方に印ばかりの床の形が拵へてあつて、そこから何だか知れない眞つ黒な懸物がかけてある。

母子とも、頗る無口で無愛嬌な、お世辭を言ふでも無ければ、ちやほやするでも無い。その代り、物ねだり一つしなければ、また格別冷淡に扱ふと言ふでも無い。美芳屋は、初めのうちは何だか頗る不滿な氣がしたが、やがて、

「あれは性分や。二人ともああ言ふ性分や。この方が好えがな。危なうなうて好えがな。ちやほや言うて取られるのより、どんだけ好えか知れへん。」

と、さう思ひ出した。そして、いつか、二階へ行くまへに、下で長火鉢を圍んで、つけた一本を婆さん相手に飲むことに極めて了つた。娘は、飲むと直ぐ頭が痛くなると言つて、一度も抔を手に取らなかつたが、婆さんのはうは、これは相當いける口と見えて、美屋芳の相手に二つ三つ重ねたくらゐでは顔色ひとつ變へなかつた。

「へえ。もういけまへん。もう十分頂きました。へえ。檀那はん。お一つ。靜さん。お酌せんかいな。」

「まあ宜しがな。も一つ重ねやす。もうおつもりや。つもり酒は癇の藥や言ひまつせ。」

「さうどすか。濟みまへんな。へえ。大きに。靜さん。二階の仕度は宜しのか。」

「へえ。宜しおす。」

娘は當り前のやうな顔をして、氣のない返事をした。

「まあ宜しがな。そない床急ぎせんかて好えがな。はつは。まあ話しまへう。」

母子は大津の生れだと言ふことで、むかしは相當な酒屋だつたのが、主人の死後すつかり親族に好いことをされて了つたのだと婆さんがくどくど繰り返した。婆さんはよく大津の話をしたが、例の三上山を七卷半卷いたと言ふ蜈蚣の話は、あれは本當は鉢卷に少し足りなかつたと言ふことで、三井寺の本にちやんとさう書いてあると眞しやかに話すと、

「ああ。左樣か。鉢卷に少し足らへんさかい七卷半か。さうか。こら理窟やがな。あつはつは。」

少し醉つた美芳屋はすつかり喜んで、腹に波を打たして居る。

はじめ美芳屋は、娘には外にも檀那があることと思つてゐた。仲へ這入つた化粧品屋の後家さんの話では、檀那は美芳屋ひとりと言ふことであつたけれども、何さま、手當がたつた二十五圓と言ふのだし、こんな客な煙草屋ひとつで母子二人の口を繋いで行ける筈が無いの

で、遉に美芳屋もこれは本當にしなかつた。ところで、もし外に檀那が有るとして、萬一その方がもつと手當が好くて、そしてもつと大事にせられて居ると、これは大いに面白くないと思つて、客なくせに大の見得坊の美芳屋は、近頃その事ばかり氣にしてゐる。

ところが、だんだん通つて氣をつけて見るに、どうも一向それらしい樣子は無い。近所まで用足しに來たやうな風を裝つて、美芳屋は、晝と夜とに何度かまへを通つて見た。ところが、いつでも娘はちやんと店に坐つてゐる。一度なんぞは、隣から嵐山の土產に「花より團子」の折を貰つたところから俄かに思ひ着いて、急に着物を着替へて、その到來物の折をぶら下げて、いかにもいま紅葉見物から歸つたやうに見せて、ひよつこり煙草屋の店へ訪ねて行つた。

「まあ。檀那はん。」

やつぱり娘は店にゐた。

「さあ。お上りやす。紅葉にお出でやしたのか。」

「へえ。こら、しやうむ無い物やが、お母んに上げとくれやす。ああ。くたびれた。くたび

れた。えらい人やつた。」

「さうどすか。そら濟みまへんな。大きに。どうどした。紅葉は。」

「へえ。まだ早うおすな。まだ五日も早うおつしやろ。」

とうとう美芳屋は一日例の二階で直接娘に聞いて見た。

「あほらしい。そんな者おすかいな。」

娘は奥の金歯をちらりと見せて莞爾した。

「あはは。有つたかて何も構へんがな。有つたかて何も宜しがな。」

「そやかて、おへんものはおへんがな。爲樣がおへんがな。好かん檀那はん。」

「あははは。」

二人は隔ての無い眼を見合せて笑つた。

一日、美芳屋は、下の二人の娘を連れて、今度はほんとうに高雄へ紅葉見に出かけて行つた。ちやうど日曜のことで、高雄はまるで押し合ふやうな人である。

「えらい人やなあ。どうや。こら迚も辨當使ふ所もあらへんがな。」

どの掛茶屋も掛茶屋もまるで歷し合ふやうに人で一杯になつて居る群衆の中を、美芳屋は二人の娘の手を引いてのろのろ歩いて行つた。

ふと、どこか向うのはうで「靜はん」に好く似た顔がちらりとしたが、果してさうかどうか見分けるひまも無く、直ぐ人ごみに隔てられて了つた。

「さうや。今日あたり一日店閉もて、二人で來てるかも知れへんな。ほんまにそれ位の樂しみやらう。」

ふと美芳屋は、一日二人で紅葉でも見て氣を晴して來るが好いと言つて、幾らかの小遣ひでもやれば好かつたと氣がついた。

「氣の利かん檀那やと思てるやろ。嘗たれなやつやと思てるやろ。」

美芳屋はいつか次第に「靜はん」が氣に入つて來た。前に一夜づとめの「娼妓」を買つた時なんぞとは丸で違ふ、不思議に心の許せる氣持がし始めた。殊にあの色の黑い無愛想な母親が、美芳屋には少しも邪魔にならずに、反つて何だか本當の女房の里へでも行つてゐるや

うな、不思議に落ち着いた氣持になるのである。

「やあ。これは美芳屋はん。」

頓驚な聲に愕いて美芳屋が振りかへると、そこの掛茶屋の入口に弘文堂が立つてゐた。

「はあ。あんたもお出でどしたのか。」

「どうだす。この人。えらい雜沓やおまへんか。へえ。まるで戰爭だんがな。」

弘文堂は例に依つて落ち込んだ大きな眼をくるくるさして居る。見ると、眼の緣かほつと紅くなつて居る。

「好えお色どすな。今日はお連れとどすか。」

美芳屋は愛想笑ひをしかけたが、

「これ。こつちへ寄つてんと明かへんがな。お足ふまれますがな。」

あわてて人濤に押される娘を傍へ引き寄せた。

「へえ。誘はれて來ましたんだつけどな。こら遊山やら何やら分からしまへんがな。まるで埃を浴びに來たやうなもんや。」

弘文堂は相變らず突拍子もない大きな聲を出して、

「そいでも、やつぱりここは好え景色だんな。紅葉はそないでも無いけど、あの水がなあ。これがどこにもおまへんなあ。」

「左樣。左樣。何せ由緒の有る所どすさかいな。ほんまに好え景色や。かう見たとこ何とも言へへんな。」

美芳屋は更めて見廻しながら感嘆したが、

「そいでは、御免やす。どうぞ御ゆつくり。」

「へえ。御免やす。歸り一緒にしまへう。」

「へえ。大きに。」

美芳屋はまた人濤に揉まれながら二人の子供の手を引いて、のろのろ神護寺のはうへ昇つて行つた。

「昨日は失禮しました。どうどした。あれから直ぐお歸りやしたか。」

「へぇ。えらい人だしたなあ。」

翌日、町内の寄合で、美芳屋はまた弘文堂と顔を合した。

「高雄へお行きやしたのか。さうどすか。美芳屋はん。あんた近頃てんとあの方へはお出掛けぇしまへんな。甚う堅ならはりまひたなあ。あの妓が待つてはりまつせ。」

「美芳屋はん。あんまり堅いの體の毒どつせ。衛生に好うおへんぜ。それとも、外に好えのが出來まひたのか。」

「何でもそないな評判や。美芳屋はん。ほんまどすか。一體どつちの方角どす。」

「あははは。どうどすやろな。」

一座の誰かれが揶かひかけるのを美芳屋は悠然と笑つて居たが、しかし、實は大いに得意であつた。

「いや。斯うなつたら、もう、さつぱりこと明きまへん。色氣も何もおへんなあ。昨日ら、子供を二人も連れて、よいよいどすがな。なあ。弘文堂はん。御覽の通りの有樣どす。」

美芳屋は勿體らしく頭を撫でた。

「あははは。そいでも、やつぱりあんたは通人や。どこや粋なところが有る。言ふことが灰汁が抜けたるがな。」

いつからか、大部分は侮蔑の意味で、美芳屋のことを粋だの通人だのと言ふ癖が附いてゐる。ところが、煽てられると知つてゐても、煽てられると、やつぱり、つい好い氣持になるのが美芳屋の性分である。

「時に、弘文堂はん。あんたも、もう一人お持ちやはんなりまへんな。どうどす。一つお世話しまへうか。」

「へつ。わたいだつか。へぇ。好えのがおまひたら、どうぞお願ひ申します。」

「それとも、もう豫約濟どすのか。どうどすのや。好う聞いとかんと明かんな。」

「いや。この人は明きまへん。こらほんまに駄目や。商賣とあの方とにかけたら、こんな敏しこい奴あらへん。へぇ。油斷も何もならしまへんぜ。まるで鼬や。美芳屋はん。うつかりお世話おしやひたら、ひどい目にお逢ひやつせ。」

「こら。なに言やがんね。」